

第50号 「存在」

私が管理職試験を受けた際の面接で、「音楽教師をやっていた経験を、管理職としてどのように生かしますか」という質問を受けました。大変緊張していたため、その時どう答えたかはっきり覚えていませんが、今ならどう答えるのか改めて考えてみました。

音楽教師と管理職の仕事は、まったく異なります。正直言って、管理職として音楽をやっている良かったと思うことはあまりありません。これはどの教科でも同じだと思います。それだけ職務内容が違うのです。ただ一つ言えることは、常に心と心のつながりを大切にしなければならないと伝え続けることができたのは、音楽をやっていたからかもしれないということです。

音楽から学んだ「心の大切さ」については、「校長室カンタービレ」でもたびたび取り上げてきました。音楽でも言葉でも、自分の心を伝えるというのは大変難しいことです。でも、その難しいことに挑戦し、それが叶った時の喜びは大きいものがあります。さらに、その心に共感してくれる相手がいたら、こんなに嬉しいことはありません。機械では不可能な心と心の触れ合い、心と心のつながり、心と心の共鳴。高校生の現状と今後の予測不能な社会を鑑みると、月並みな言い方ではありますが、「心の教育」が最も大切なものになると私は考えています。

では、今なら面接でどう答えるかを書きます。「組織を形成するのは一人一人の人間です。そしてそれぞれに心が存在します。その心と心がつながらなければ組織は機能しないと考えます。私は、音楽教師の期間も含め、音楽を通して学んできた心のつながりを大切にし、心が通い合う温かい学校経営を行いたいと考えています。」

このような答えしか思いつきません。非常に抽象的で、期待された答えではないかもしれませんが。しかしこれが、音楽を通して形成された私の人生観・教育観なのです。

最後に、私が常日頃心がけていることを、相田みつを氏の言葉をお借りして紹介します。

*あなたがそこにいるだけで、その場の空気が明るくなる。
あなたがそこにただいるだけで、みんなの心がやすらぐ。
そんなあなたに私もなりたい。*

第49号 「第2の人生」

私は、年齢を重ねるにつれ、自分自身の人生を振り返ることが多くなってきました。なぜ自分は音楽を学んできたのか、なぜ教員になったのか、なぜ管理職になったのか、改めて考えると自分の志の低さを痛感してしまいます。

まずは私がピアノを始めたきっかけです。自分ではまったく覚えていませんので、母親から聞いたことを書きます。幼稚園から家に帰った私は、園で習った歌をよく歌っていたそうです。それを見ていた母が、おもちゃのピアノを買ってくれて、そのピアノで無邪気に遊んでいたそうです。母が私の好きなことに気付いてくれなければ、今の私は存在していなかったのかもしれませんが。その後、ヤマハの音楽教室に通い、ピアノの個人レッスンに通い、あとはお世話になったピアノの先生方によって敷かれたレールを、ひたすら走り続けてきました。今考えると、どこまで自分の意志が働いていたかは疑問です。

大学4回生の時、数年間募集のなかった高校音楽教員の採用試験があることがわかり、周りからの勧めにより受験し、今に至っています。この時も、教師になりたいという強い意志が自分にあったとは言えません。

平成25年、当時の勤務校校長から管理職試験を受けることを勧められました。自分としてはまったく考えてこなかったことですので、最初は断りました。もちろん自分の能力の限界は理解していましたが、生徒との関わりが減るのが嫌だったからです。最終的には受験を決意し、現在に至っています。この時も、自分に強い思いがあったかと言うと、そうは言い切れません。

私は生徒たちに、自分の思いを強く持って具体的行動に移すことが大切だと言っています。しかし、自分自身を振り返ってみると、そんな偉そうなことを言う資格はありません。ただ、様々な人との出会いによって、自分の進む道が開け、現在の自分が存在していることは事実です。自分の歩んできた道が本当に自分でやりたいことだったのか、本当に自分で歩むべき道だったのか、他の道はなかったのか等、年齢を重ねるにつれて様々な思いを巡らせるようになってきましたが、今となっては、自分の道を精一杯歩いていくことでその答えを出すしかないと思っています。ただ、私の定年退職予定の2021年度末から、定年が延長になるという噂があります。そんな話を聞くと、今後の生き方について、ますます考えてしまいます。日本人の男性の平均寿命は81歳を超えました。年金受給は65歳からです。親の介護もあります。現実を見つめながらも、第2の人生をどのようなものにするか、どのタイミングでスタートさせるか、真剣に悩んでいます。前述のとおり、自分の強い意志で人生を歩んでこなかった私です。今でも趣味はないし、これからやりたいと思うこともなかなか見つかりませんが、今度こそ、自分の意志で自分の今後の人生を選択したいと思っています。生徒にも「自分の道は自分で決めなさい」と言っている私なのですから。

第48号 「ピアノメーカー」

私の専攻楽器はピアノです。ピアノには、グランドピアノとアップライトピアノ、さらには最近では電子ピアノと呼ばれているものがあります。今号は、グランドピアノを中心にした「ピアノメーカー」について書きます。

皆さんがピアノメーカーとして思い浮かべるのは、ヤマハやカワイではないでしょうか。2社とも日本が世界に誇るピアノメーカーです。現在の世界のピアノシェアにおいては、1位がヤマハで2位がカワイです。日本のピアノ生産技術が世界で認められている証拠です。しかし、最初から認められていたわけではなく、伝統あるヨーロッパのピアノを東洋人が作れるはずがないと馬鹿にされた時代が長く続きました。

ヤマハは、1897年に山葉寅楠（やまはとらくす）が静岡県浜松市で設立しました。カワイは、1927年にヤマハに勤めていた河合小市（かわいこいち）が同じ浜松市に設立しました。2社とも世界に名が知られるようになったきっかけは、1985年のショパン国際コンクールで公式ピアノとして採用されたことです。その後少しずつ国際的に認められ、世界中の超一流のピアニストたちに愛されるようになりました。2社の特筆すべき点は、欧米諸国ではすべて手作りが主流だったピアノを、工業製品として位置付け、ライン生産方式による量産化を成功させたことです。しかも高品質を維持しての量産化です。日本人の物づくりに対する情熱と技術の高さがピアノ製作にも生かされたということです。

ここからは、世界の三大ピアノと呼ばれているピアノメーカーを紹介します。ベーゼンドルファー、ベヒシュタイン、スタインウェイ・アンド・サンズ（通称スタインウェイ）の3社です。

ベーゼンドルファーは、1828年にオーストリアで設立されました。標準的な88鍵のピアノに加えて、低音部が拡張された92鍵および97鍵のピアノを製造しています。私も弾いたことがあります。深くて上品な音色がする印象を持ちました。日本にも常設しているホールがあります。

ベヒシュタインは、1853年にドイツで設立されました。残念ながら私は弾いたことがありませんし、国内ではあまり見かけないのが現状です。

スタインウェイは、1853年にアメリカのニューヨークで設立されました。非常に頑丈で強固な構造を持ち、ピアノ全体で豊かな音を響かせます。何千人収容の大きなホールでも十分に響かせることができ、ピアノの王様と呼ばれています。国内の主なホールには必ずと言っていいほど常設されているピアノです。

実は、我が家にはスタインウェイがあります。もちろん家庭用の小さなもので、製造番号から1963年製であることが判明しました。長い間手入れもされず相当傷んでいますが、弾いてみると何とも言えぬ良い音がします。今は家具の一部になってしまっていますが、退職後にはしっかりと修理し、スタインウェイの響きをまた楽しみたいと思っています。

५.

第47号 「印税」

皆さんは、「印税生活」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。音楽の世界で1曲でも大ヒットを記録すると、一生困らないような額の大金が入ってくるらしいのです。夢のような話です。

そもそも印税って何なのでしょう。どのような仕組みで支払われるのでしょうか。少し調べてみましたので、できるだけ簡潔に書きたいと思います。

著作権で利益を得ることに関してプロではない作曲家や作詞家は、著作権を音楽出版社に譲渡します。音楽出版社は、JASRACに著作権管理を委託します。JASRACは、利用者から著作権使用料を徴収します。この使用料は、音楽出版社に著作権料として渡されます。音楽出版社は、その著作権料を作曲家や作詞家に分配します。この分配金を印税と呼んでいるのです。

CDの売り上げで具体的な例を数字であげてみます。わかりやすくCDの単価を1,000円として計算します。JASRACが著作権使用料として単価の6% (60円) 徴収します。残りはレコード会社やCD小売店の利益そしてジャケット代となります。JASRACは60円のうちの6% (3.6円) を手数料として受け取り、残りの56.4円を著作権料として音楽出版社に渡します。そして、音楽出版社は56.4円のうちの50% (28.2円) を取り分とし、作曲家に25% (14.1円)、作詞家に同じく25% (14.1円) を配分します。作曲家と作詞家にはそれぞれ1,000円のうちの14.1円 (1.41%) が印税として手に入ることになります。この配分割合は契約によって決められますが、一般的には1.5~2%のようです。さらに、著作権としては扱われませんが、アーティストにはレコード会社から歌唱印税というものが支払われます。これも契約次第ですが、一般的には1%程度ということです。

では、作曲家に2%、作詞家に2%、アーティストに1%の配分と仮定し計算します。1,000円のCDが大ヒットして100万枚、つまり10億円の売り上げがあった場合、作曲家と作詞家にはそれぞれ2千万円、アーティストには1千万円の印税が入ります。もし、作詞・作曲・歌唱をすべて一人で行うシンガーソングライターだとしたら、5千万円の収入があるということです。さらに、カラオケ等での楽曲利用による著作権料も、作曲家と作詞家には入ります。カラオケに関しては、歌や演奏は著作物とみなされず著作権が発生しないため、アーティストに取り分はありません。たとえば、大ヒットした「女々しくて」がカラオケでいくら歌われても、ゴールデンボンバーではなく、作詞・作曲をした鬼龍院翔にしかお金が入らないということです。鬼龍院翔は、この一曲だけで数億円稼いだとも言われています。羨ましい話です。

印税に関する有名な失敗談を一つ紹介します。1976年、フジテレビの子ども向け番組「ひらけポンキッキ」の中で流れた「およげたいやきくん」は、シングル盤で空前絶後の4

55万枚の売り上げを記録しました。ところが、この曲を歌った子門真人は、子どもの歌だから売れてもたかがしれていると考え、5万円のアルバイト料のみで契約してしまったのです。印税なしです。悲しい話です。

私はひたすら現実を見つめ、着実に人生を歩んでまいります。

第46号 「JASRAC」

前号で書いた「著作権」において、時代とともに著作権管理業務や使用料の支払い等の事務が徐々に煩雑となり、その業務を担う団体が生まれてきました。この団体を「著作権管理団体」と呼びます。

世界で最初の著作権管理団体は、1842年にフランスで設立されています。日本では、1939年に設立された「日本音楽著作権協会」が担っています。通称「JASRAC（ジャスラック）」と呼ばれ、本部は東京の古賀政男音楽文化記念財団が所有するビル内にあり、現在では国内主要都市に15の支部が設置されています。ちなみに、中国支部は広島にあります。

私も演奏会を開催した際には、JASRACに申請していました。というか申請させられていたというのが正直なところです。ホールを使った演奏会ですと、こちらが依頼したわけでもないのにJASRACから申込書類が送られてきました。その用紙に記入し返送します。その後、著作権使用料の決定通知が来て支払いを行います。また、吹奏楽コンクールなどでレンタル楽譜（通常の販売楽譜とは異なり、貸譜としてのみ取り扱われる楽譜）を演奏する場合は、定められた金額を払ってレンタル楽譜利用許諾書をコンクール主催者に提出していました。使う側にとっては少し面倒な作業ですが、法律で決められていることですので当然守る義務があります。著作権使用料規定で定められているものは、利用者にとってまだわかりやすい。しかし、近年の技術進化に伴い、世界中のすべての人が情報の発信者・利用者となり、海賊版やパクリサイト等の問題が生じています。一方で、利用者が発信する権利をどう集中管理するかも問われています。使う側とJASRACの間で様々な衝突が起きているのも事実です。

最近では、音楽教室における著作権料徴収問題が話題になっています。

2017年、JASRACが音楽教室での演奏についても著作権料を徴収する方針を打ち出しました。それまでは著作権対象としていなかった音楽教室での演奏権（公衆に聞かせることを目的に、楽曲を演奏したり歌ったりする）を、突然徴収対象とすると発表したのです。これに対し、ヤマハやカワイ等の音楽教室を運営する企業・団体が、「音楽教室を守る会」を結成し、猛烈な反対運動を展開しました。

JASRACは、「音楽教室は生徒募集の広告で教師による高い音楽に触れることを宣伝しており、聞かせることを目的としている。教室での教師・生徒の演奏はいずれも公の演奏にあたる。」という主張をしています。一方、音楽教室を守る会は、「音楽教室での練習や指導のための演奏は、教育として技術を学ばせるためのものであり、公の演奏にはあたらない。聞かせることを目的とした演奏ではない。」と主張しています。両者は平行線をたどり、結局は司法判断を仰ぐことになりました。

JASRACは、「音楽著作権を保護することと音楽文化の普及発展に寄与すること」を

目的としています。音楽教室は、「音楽教育を通じて音楽文化の普及発展に寄与すること」を目的としています。音楽文化の発展普及という同じ目的を持つ団体が争う目的とは何なのでしょう。この係争が、音楽の発展を阻むことにならないことを祈ります。

第45号 「著作権」

第43号と44号で、音楽の発展に貢献したものとして、「楽譜」と「録音・再生技術」の存在を挙げました。これにより、音楽の楽しみ方が広がったことは間違いありません。その一方で大きな課題も生じました。それが「著作権」と呼ばれているものです。

著作権について、ざっくりと説明します。

まず、自分の気持ちや考えなどを作品にしたものを「著作物」と言います。その著作物を作った人を「著作者」と言います。そして、著作物を独占できる著作者に対し、法律によって与えられる権利を「著作権」と言うのです。

著作者は利用を許可する代わりに、「使用料」を徴収することができます。また、使用料の取り分を決めた上で、出版社等の他者に著作権を譲渡することもできます。他人の著作物を利用したいときには、著作権を持っている人から利用の許可をもらい、定められた使用料を払う義務があるということです。勝手に使用することは「著作権侵害」であり、利用行為の停止や損害賠償を請求され、刑罰が科されることもあります。ただし、著作権には保護期間があり、原則として著作者が亡くなってから50年で権利が消滅します。

このような著作権制度は、著作者の努力に報いることで文化を発展させることを目的としています。そしてこれらのルールは「著作権法」という法律で定められています。

15世紀後半に活版印刷が発明されるまでは、著作権が議論されることはほとんどなかったようです。印刷機で大量生産できるようになってから本格的に議論され、1545年にヴェネツィアにおいて歴史上最初の著作権法が制定されました。そして1710年にイギリスで、近代の著作権法に大きく影響を与えたアン法が制定されます。その後、各国で著作権の概念の普及と法整備が行われました。これを国際的に統一したものが、1886年に締結されたベルヌ条約です。現在約170の国が加盟しています。この条約は何度かの改訂を経て現在に至っています。日本は、1899年にベルヌ条約に加盟し、同年に著作権法（旧法）が施行されました。この旧著作権法は1970年に全面改正され、現在の著作権法が公布されています。

しかし、録音・再生技術の進歩とメディアやインターネットの普及、さらには圧縮フォーマット等の登場により、今までの考え方では対応しきれない新たな問題も発生しています。著作権使用料において、経済的利益つまり商売を優先させすぎると、文化の発展という本来の目的が失われてしまう気がします。使う側のモラルやマナー、そして、みんなで文化を守り発展させるという意識が、今後ますます問われる時代となることでしょう。

第44号 「録音・再生技術」

音楽文化の発展に大きく寄与したものとして、前号では「楽譜」の存在を挙げました。今号は、音楽産業の発展に多大なる貢献をした「録音・再生技術」の進歩について書きます。

思い浮かべる録音機械は、年齢によって異なると思います。私にとっては、カセットテープです。車の中で聴いていた頃が懐かしく感じられます。よくテープが絡んでしまい、それを直すために鉛筆を穴にさして手でゆっくりと巻き直していたことも思い出します。私が昔集めていたカセットテープはどこに行ってしまったのでしょうか。見つけたとしても、テープ自体が伸びきっていて役に立たないと思います。こんな話をしても、高校生には伝わらないでしょうが…。

さて、録音と再生の理論的な仕組みは、私には難しくよくわかりませんが、この録音技術の進歩とそれを伝達するラジオやテレビのメディアさらにはインターネットが普及したことにより、世界中の音楽が身近なものとなり、そこから新しい音楽ジャンルが生み出されたことは紛れもない事実です。

では、録音・再生技術の歴史について調べてみましたので、簡単に紹介します。

発明王エジソンが、1877年に「フォノグラフ」と呼ばれる蓄音機を発明しました。円筒状の金属に錫箔を巻き付けるもので、数十秒程度の録音・再生が可能だったようです。ちなみに、最初に録音した曲は、エジソン自身の声による「メリーさんの羊」だと言われています。

蓄音機をさらに進化させ量産できるようにしたのが、1887年にベルリーナが発明した円盤式蓄音機「グラモフォン」です。いわゆるレコードの原型と言えます。さらに1948年にはLP (Long Play) レコードが実用化され、片面で約20分の録音が可能になりました。

1929年にドイツで開発された磁気テープを実用化したものが、「オープンリール」と呼ばれるものです。これをコンパクト化した「カセットテープ」が、私が生まれた1962年に発売されました。そして1979年、ソニーが世界的に大ヒットさせたポータブルカセットプレイヤー「ウォークマン」を発売します。この「ウォークマン」の登場によって、場所を選ばずに自分一人で音楽を楽しむことができるようになりました。猿がヘッドフォンを耳に当てていたCMを思い出します。

1982年、CD (Compact Disc) が発売され、一気にデジタル化が進んでいきます。1987年にはDAT (Digital Audio Tape) が、1992年にはMD (Mini Disc) が登場しましたが、どちらもあまり普及せず、CDが主流の時代が続きました。

現在、Mp3を代表とする圧縮フォーマット技術の進歩とインターネットの普及により、音楽の楽しみ方がさらに広がっています。

録音・再生技術が発明されるまでの音楽伝承は、クラシック音楽のように楽譜で記録、

あるいは民族音楽のように人から人への口承によるものでした。しかし、技術の進歩により、生で聴くしかなかった音楽を気軽に家庭や外で聴けるようになり、音楽の楽しみ方に大きな変化をもたらしたと同時に、音楽の可能性と選択肢に大きな広がりをもたらしたのです。

第43号 「楽譜」

前号で取り上げた「能楽」は、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。無形文化遺産とは、各地域で長い時間をかけて受け継がれてきた伝統や慣習などの文化を、保護すべき遺産として認定する制度、およびその制度に基づき認定された文化のことを指します。人工的あるいは自然を問わず、目に見える形で残っている物を保護する「世界遺産」とは異なります。日本の世界遺産には、石見銀山遺跡や姫路城・厳島神社などがあります。無形文化遺産には、能楽の他、雅楽・文楽・歌舞伎・和紙製造技術・和食文化などが登録されています。つまり無形文化遺産は、社会的慣習や行事、芸能、口承で伝えられてきた表現など、形の無いものを対象としているということです。

実は音楽も、もとは「音を耳から伝承するだけの形の無いもの」でした。つまり、人の演奏を聴いて記憶し、記憶したものを演奏することで人に伝えるという、言わば伝言ゲームのようなものだったのです。これでは人の記憶次第で正確なものは伝わりませんでした。しかし、それを大きく変えたのが「楽譜」の発明です。耳でしか感じられない「音」を、目で見える「記号」として表現したものが「楽譜」なのです。同じような人類の発明として「文字」を挙げることもできるかもしれません。

楽譜が誕生したのは、紀元前2世紀頃と言われています。何となく音の高さを表すだけの「文字譜」だったようです。その後、古代ローマ帝国の勢力拡大に伴い、キリスト教がヨーロッパ各地に普及します。キリスト教は聖歌と呼ばれる音楽を大切にしていたため、何らかの形で聖歌を記録に残すことが迫られました。そこで考案されたのが「ネウマ譜」と呼ばれるものです。

初期のネウマ譜は、聖歌の歌詞の上に小さな点のようなもの（ネウマ：ギリシア語で合図という意味）を書いて音の高さをわかるようにしたもので、楽譜というよりは覚書メモ程度のものでしかなかったようです。やがて、基準となる音を定めて、それより高いか低いかがわかるように1本の横線を用いるようになります。さらに正確な音高を示すために、横線が2本、3本と増えていったと考えられます。そして11世紀頃には4本線になったと言われています。ネウマ譜には明確な音の高さが記されている一方で、音の長短の表記は不明確でした。この欠点を解消するため、音符の形で区別し長短（リズム）を表記した「定量譜」と呼ばれるものが13世紀に登場しました。その後も様々な改良が加えられ、現在のような五線譜が完成したのです。現在の記譜法になって何百年もたちますが、変わることなく使われています。楽譜の存在が音楽の発展に寄与したことは言うまでもありません。

そして、15世紀後半にグーテンベルクによって活版印刷が開発され、楽譜が機械で印刷できるようになりました。大量印刷によって楽譜を安く手に入れることができるようになり、社会全体に音楽が広がっていったのです。

これらの五線譜は、一般的に西洋音楽で使われますが、日本の伝統音楽の楽譜は、ギター

やベースでお馴染みの「タブ譜」に近いものが使われ、楽器固有の奏法を文字や記号で表すことが多いようです。

第42号 「能楽」

2018年11月に松江を会場として、「第49回中国・四国音楽教育研究大会」が開催されました。大会全体テーマを「感じてつながれ！感じてひろがれ！」と掲げ、校種別授業研究や全体会での記念講演・研究演奏などがありました。高校部会の授業研究では、日本の伝統芸能である「能楽」が取り上げられました。

私には能の知識はまったくありません。もちろん生で鑑賞したこともありません。部分的に映像で見たことがある程度です。それでも、自分なりに調べてみました。しかし、能についてはあまりにも記述が多く、かつ複雑で、なかなか理解できません。能には歴史があり、能から派生したものがたくさんあるということだけはわかりました。従って、ここからは能の初心者として、非常に表面的な私の解釈で勝手に述べさせていただきます。しかも部分的に鑑賞したDVDの感想程度のものです。

まず、ステージにあたる能舞台は、非常に簡素なものだと感じました。演目にもよるでしょうが、同じ舞台芸術のオペラやミュージカルにある大掛かりな舞台セットと比べると、能舞台は非常に質素です。しかも、狭い正方形の舞台上で、「謡（うたい）」という声楽と「囃子（はやし）」という楽器による少人数の限られた音楽演奏にのせて、無表情な能面をつけた役者の動き・舞によって物語が進行していきます。動きも音楽も、制限されたものの中で表現しなくてはならないという窮屈さを感じてしまいました。そしてストーリーがわかっていないと、正直言って何を表現しているのか理解できません。つまり、ある程度の知識を持っていないと、退屈でどう鑑賞して良いのかわからない芸能分野だと最初は感じたのです。

しかし、前号で書いた枯山水と同様、能には「引き算の美学」「余白の美学」があることに気付きました。つまり、余分なものを排除した舞台や能面、そして「無」の空間・時間である余白を、見ている側の価値観・心で満たすことが、能の世界では大切にされているのではないかと感じたのです。余計なものをそぎ落とした引き算の美学、無表情な能面から自分なりに読み取る感情、動きや音の間に生じる無の状態である余白に特別な価値観を見出す「能」。見えないものを見る。これが能の醍醐味なのかもしれません。

人間の心も見ることができません。この見えない心を見ることができたら、どれだけ便利なことでしょうか。もしかしたら人間関係でのトラブルが減るかもしれません。しかし、本当に目で見えるものになってしまったら、人間としての成長が止まってしまうのではないかと思います。見えない心を理解しようとすることによって、人の心は成長するはず。日本の美意識を大切にすることは、見えない心を大切にすることではないでしょうか。

第41号 「枯山水」

皆さんは、「庭園」と聞いてどのような景色を思い浮かべますか。「庭園」とは、見て歩いて楽しむために樹木を植えたり噴水・花壇を作ったりなど、人工的に整備された施設のことを言います。

島根県には有名な庭園がいくつもあります。たとえば、松江イングリッシュガーデンは、イギリスの長い庭園史の中でも19世紀中ごろから20世紀初めにかけての代表的な庭園様式を採用して造られており、人工的なフォーマルガーデンと自然の風景をそのまま生かすことを目的としたインフォーマルガーデンの異なった二つの区画が巧みに配置されています。多目的ホールでは演奏会なども企画され、私も何度か訪れたことがあります。また、日本庭園として、松江の由志園、皆美館、平田の本陣記念館、そして安来の足立美術館など、多くの素晴らしい庭園が存在します。特に足立美術館の庭園は、アメリカの日本庭園専門誌「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング」で、900か所以上の日本庭園の中から長期間にわたり連続日本一に選ばれています。また、フランスの旅行ガイドブック「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」で、山陰では唯一となる最高評価の三つ星を獲得しています。このような評価もあり、現在では外国からの入館者が大幅に増加しているようで、マスコミでもたびたび取り上げられるようになりました。広大な敷地に「枯山水庭」「白砂青松庭」「苔庭」などの6つの庭があり、日本庭園における造園技法の一つである借景の手法もとられ、庭園全体が一つの絵画のような美しさを作り出しています。若干入場料が高い気もしますが、この美しさを保つための専属庭師や美術館スタッフの毎日の努力を考えれば、納得せざるを得ません。それほど価値ある庭園なのです。

なんだか観光案内のようになってしまいましたが、ここからは、「日本の美意識」について述べます。

日本庭園様式を代表するものとして、足立美術館にもある「枯山水」を挙げることができます。枯山水は、水を一切使わずに石や砂のみで山水を表現する様式です。つまり、石を山のように、砂の模様を水の流れるように見立て、見る人にあたかも水が流れているかのように感じさせる手法です。この「見立て」という手法は、落語で扇子を箸の代用として使うなど、日本独自の芸術表現の一つとされています。「見立て」を使って、水がないのに水を感じさせる、水を感じたいからあえて水を使わない、つまり「水」を引き算することによって何も無い空間・無の状態・余白を生じさせ、それを見る人の心で満たしていく。これが日本の美意識であり、「引き算の美学」あるいは「余白の美学」であると言われる所以なのです。

日本には、装飾や無駄をあえて引き算し、余白を残すことで生まれる価値を大切にしてきた文化が残っています。しかし現代は、私も含めて、余白をどう埋めていくかという足し算の価値観だけで生活するようになってきている気がします。日々の生活に追われている今だから

こそ、余白に美を求める日本人の貴重な価値観を見直してみる必要があるのではないかと、私は感じています。

第40号 「日本の美意識」

第38号で「オノマトペ」について記述した際、日本の美意識について少し触れました。今号は、この日本の美意識について、私なりに少しだけ掘り下げてみたいと思います。

そもそも美意識とは何なのでしょう。人が美しいと感じる心の働き、つまり何を美しいと感じるかということです。当然のことながら、美しいと感じるものは個人によって異なります。たとえば、規則正しく整然と並んでいるものを美しいと感じる人がいれば、規則性のない並びを美しいと感じる人もいます。左右対称のかたちに美を感じる人も非対称に美を感じる人もいます。また、派手で豪華なものを美しいと思う人もいれば、シンプルで質素なものを美しいと思う人もいます。隙間がなくすべてが埋め尽くされているものを美しいと感じる人も、空白や余白があることによって美しさを感じる人もいます。

このような個人の美意識に先天的なものがあるかどうか私にはわかりませんが、それぞれの生まれ育った自然・社会・文化・教育などの生活環境が大きく関わっていることは間違いないと思います。

我々日本人にとって、「花」と言えば「桜」ですよね。桜は一年のうちのほんの一瞬しか咲きません。桜前線という言葉もありますが、日本人は何か月も前からその瞬間を楽しみにし、花見を計画します。最近は桜の美しさより花見自体を楽しみにしている人が多いようですが…。そしてあっという間に散っていく桜に「はかなさ」や「無常観」を感じるのです。その桜の「はかなさ」に「もののあはれ」（しみじみとしたおもむき）を感じ、美しさを見出すのです。

「あはれ」以外にも、無常に美を見出そうとする日本の美意識・文化を表す言葉として、「幽玄（ゆうげん）」や「侘び寂び（わびさび）」などがあります。

「幽玄」は「神秘的な深み」とも言われますが、「奥深いおもむき」を表します。実際に目に見えるものを表すのではなく、「その奥に人間を感じる美しさ」を表す言葉です。文芸・絵画・芸能・建築等の芸術領域でよく使われます。

「侘び」は「簡素な中に見出される静かで落ち着いたおもむき」を表し、「寂び」は「時間とともに古くなったもののおもむき」を表します。この侘びと寂びを一緒に使い、「簡素でありながらも静けさや寂しさを感じるものに美しさを感じる」という意味で「侘び寂び」と言います。茶道でよく使われる言葉です。

このように、マイナスのイメージがあるものにプラスの価値を見出そうとするところに、日本人の美意識の特徴の一つがあるのかもしれませんが。

明治の文明開化以降、西洋文化を積極的に取り入れた日本ですが、日本の風土や慣習の中で培われた日本独自の伝統美は、間違いなく残っています。ただ、日本の伝統文化は一部の人たちのみで継承されているのが現状で、一般の人たちには縁遠いものとなっています。私はせめて、日本独特の感性や美意識だけは持ち続けていきたいと考えます。それを伝えていく

ことも教育の大きな役割だと考えています。

第39号 「オノマトペ2」

外国人が日本語を勉強する際、最もわかりにくいものの一つに、オノマトペがあると言われています。微妙なニュアンスを表現する日本語独特のオノマトペが理解しづらいらしいのです。

たとえば、痛みを表す日本語には「チクチク」「ピリピリ」「ズキズキ」「ガンガン」「キリキリ」など、様々なオノマトペがあります。私もお医者さんに痛みのニュアンスを伝える時に、胃がキリキリするなど表現します。英語で「痛み」を表す時には「pain」を使いますが、どんな痛みかを表現する場合には、「dull：鈍い」や「severe：激しい」などの形容詞を使うそうです。

また笑い方に関しても、英語では「laugh」や「smile」を使いますが、日本語では「ニコニコ」「ニヤニヤ」「ニタニタ」「クスクス」「ゲラゲラ」などのオノマトペを使うだけで、我々には笑いのニュアンスが伝わってきます。

このように、オノマトペというのは微妙なニュアンスを伝える手段として大変便利な言葉であり、日本人としてのコミュニケーションにおいて大変重要なものとなっています。

少し難しい話になりますが、特定の音が特定のイメージと結びついて知覚される現象を、「音象徴（おんしょうちょう）」と呼びます。たとえば、母音の「ア」は「大きい」「明るい」「広い」、**「イ」**は「小さい」「狭い」、**「オ」**は「暗い」というイメージを持つ人が多いという実験データがあります。また、「パ行音（パピプペポ）」には「明るい」「子供っぽい」、**「濁音（ガギグゲゴ等）」**には「大きい」「荒い」というイメージがあると言われています。そう言えば、子供が好むお菓子には「パピコ」「ピノ」「プリッツ」「ポッキー」など「パ行音」を使った商品が多く、怪獣には「ガメラ」「ゴジラ」「キングギドラ」などの「濁音」を使った名前が多いような気がします。これは「音象徴」を考慮した上でのネーミングなのか偶然のネーミングなのかはわかりませんが、音からイメージする力が我々には備わっていて、この力がオノマトペの成り立ちに深く関係していることは否定できないと思います。深読みしすぎでしょうか。

「音象徴」のように「音からのイメージ」をもっと具体的に感じる人を、「共感覚者」と呼ぶそうです。たとえば、特定の音程・和音・音楽などを聴いて特定の色を感じる人がいます。これを「共感覚」の中でも「色聴」というそうです。「色聴」を持つ有名な作曲家としてオリヴィエ・メシアン（1908～1992年・フランス）がいます。彼は、「私は音楽を聴くとき、いつもそれに対応する色彩が見える。また楽譜を読むときも、それに対応する色彩が見えるのである。」と語っています。

音以外にも、文字や数字に色を感じる人や、形に味を感じる人がいるということも知られています。一つ一つの感覚を鍛えることも難しいのに、それをつなげてイメージできる人がいるのですね。人間の能力って本当に不思議です。

第38号 「オノマトペ」

♪「しとしとピッチャンしとピッチャンレーとーピッチャン」。若い人は知らないかもしれませんが、橋幸夫が歌った「子連れ狼」の一節です。雨という言葉は出てきませんが、この歌詞だけで、冷たい雨が降り続く中、挿一刀が大五郎を乳母車に乗せて歩く情景が、私には浮かんできます。

♪「ピッカピッカの一年生」。小学館の雑誌のCMで流れたキャッチフレーズです。これを耳にするだけで、服やランドセルの真新しさはもちろんのこと、希望に満ちた元気な小学一年生の姿が目には浮かんできます。

ピッチャンとかピカピカという言葉は、「オノマトペ」と呼ばれています。

オノマトペとは擬声語を意味するフランス語（onomatopée）で、擬声語とは擬音語と擬態語の総称です。

擬音語とは、自然界や人間社会で発せられる音や声を真似て、文字・言葉で表現したものです。たとえば、「ザーザー」「カンカン」「ギャーギャー」「ワンワン」「チュウチュウ」などがあります。

擬態語とは、動作や状態あるいは心情などの音がしないものを、文字・言葉で表現したものです。たとえば、視覚的なものでは「キラキラ」、臭覚的なものでは「ツーン」、触覚的なものでは「ベタベタ」などがあり、心情を表すものとして「ハラハラ」「ワクワク」などがあります。

ちなみに、「ポケモン」の「ピカチュウ」は、雷が光る様子を表した擬態語「ピカ」と、ネズミの鳴き声を表した擬音語「チュウ」を組み合わせたものです。もしかしたらこの名前の付け方も、日本や世界で受け入れられた理由の一つかもしれません。私も素晴らしいネーミングセンスだと感心しています。その他、世界に誇る日本文化である漫画の世界においても、情景描写としてたくさんのオノマトペが使われていることはご存知だと思います。

実は、日本語におけるオノマトペの数は、英語に比べて3～5倍あると言われています。その理由として、日本語は形容詞と動詞の数が少ないからだという説があります。「ワンワン」と鳴く犬、「ガオー」と鳴くライオン、「ゲロゲロ」と鳴くカエル、日本語では「鳴く」という表現を使います。しかし英語では、犬は「bark」、ライオンは「roar」、カエルは「croak」という、個別の動詞で表現します。この個別の動詞は、日本語では「ほえる」とか「さえずる」などにあたるとは思いますが、日本語では「鳴く」という動詞でも通用するのです。このような言葉の数の理由から、日本語のオノマトペが増えていったことは間違いのないと思いますが、私はそこに、日本人の独特で豊かな感性が存在していることを忘れてはならないと考えています。

四季が存在し自然環境に恵まれている日本では、このオノマトペを使って微妙な自然観を絶妙に表現してきた歴史があります。動物や自然の音を人間の声と同じように認識すること

に美を求める日本人、また、音のないものを音として表現する擬態語で深く心にしみわたる情感を表そうとする日本人。グローバル社会だからこそ、日本の美意識をもう一度考えてみることも必要ではないでしょうか。

第37号 「ヒーリングミュージック」

前号では「モーツァルト効果」について書きました。モーツァルトの曲に限らずクラシック音楽には、心を安定させる効果があると言われていました。

人は音楽を聴くとき「右脳」を使い、その間「左脳」は休ませており、このことが「ヒーリング効果」（心と体の疲れを癒し、心身のバランスを回復させる効果）を生むようです。

人によって癒される音楽は異なると思いますが、近年「ヒーリングミュージック」と呼ばれている音楽には、音楽の三要素（メロディ、ハーモニー、リズム）において、「美しいメロディ」と「シンプルなハーモニー」そして「ゆったりとしたリズム」が共通点としてあげられるとされています。もちろんこれがすべてではないと思いますが、多くの人が癒しを感じる音楽には、このような共通点があるという分析がなされているのも事実です。

難しいことはわかりませんが、脳波にはガンマ波（怒っている時や興奮している時に発生）、ベータ波（日常生活を送っている普通の時に発生）、アルファ波（リラックスしている時に発生）、シータ波（まどろんでいる時に発生）、デルタ波（深い睡眠をとっている時に発生）が存在し、ヒーリングミュージックを聴くとアルファ波が引き出されると言われています。もちろん、ヒーリングミュージック自体からアルファ波が出ているのではなく、脳のアルファ波を引き出すような環境を作り出す音楽だということです。そしてクラシック音楽の中には、このアルファ波を引き出す曲がたくさんあるようです。

クラシック音楽も含めたヒーリングミュージックには、波の音・小川のせせらぎ・鳥のさえずり・雨音等の自然界に含まれる「1/fゆらぎ」があるとされています。「1/fゆらぎ」とは、一定のようでは実は予測できない不規則なゆらぎのことを表し、この「1/fゆらぎ」がアルファ波を引き出すらしいのです。「1/fゆらぎ」を引き出すクラシック音楽として、バッハ作曲の「G線上のアリア」、ショパン作曲の「雨だれ」、ドビュッシー作曲の「月の光」、シューベルト作曲の「アヴェ・マリア」、シューマン作曲の「トロイメライ」、パッヘルベル作曲の「カノン」等、多くの曲があげられています。

最近ではヒーリング効果の高いクラシック音楽を集めたCD等も発売されていますので、興味のある方は聴いてみてください。ちなみに私は、ヒーリング効果を期待してクラシック音楽を聴いたことはありませんが、自分のその時の気分にあった曲を探すというのも、クラシック音楽の一つの楽しみ方なのかもしれません。

最後に、クラシックではありませんが、イギリスの音楽療法学会において、世界一癒し効果がある音楽として認定された曲を紹介します。それは、マルコニ・ユニオン作曲の「Weightless（無重力）」という曲です。効果のほどは、ご自分でご確認ください。ちなみに、私は効果を感じられませんでした。

第36号 「モーツァルト効果」

皆さんは、「モーツァルト効果」という言葉を聞いたことがありますか。

ある解説では、「モーツァルトに代表されるクラシック音楽を聴くと頭がよくなると主張される効果」と記されています。本当に効果があるのかという真偽は定かではありませんが、様々な実験と研究が行われているのは事実です。

私は演奏技術を学ぶほうでしたので、あまり考えたことはありませんでしたが、モーツァルトの音楽が心身に影響を及ぼすのではないかと以前から言われていました。それが一般的に知れ渡ったのは、1993年にカリフォルニア大学の心理学者フランシス・ラウシャーが行った実験が、学術誌「ネイチャー」に論文として取り上げられたことがきっかけです。

実験内容は、36人の学生に対し、アニメ「のだめカンタービレ」でも演奏されていたモーツァルト作曲「2台のピアノのためのソナタK448」を聞かせる、他のヒーリング音楽を聞かせる、何も聞かせず静かに待機する、この3パターンの環境に置いたあと、IQテストを実施するというものでした。結果は、モーツァルトの曲を聞いたあとのテスト結果が著しく良かったことが発表されました。ただし、この効果は音楽を聴いて15分程度見られる限定的なものであると報告されています。その後1999年には、ハーバード大学のクリストファー・チャビスによって、モーツァルト効果はモーツァルト以外のクラシック曲でも生じることが発表されています。一方、アパラチア州立大学のケネス・スティールらによって、ラウシャーの実験結果は再現できなかったことも報告されています。そして2010年には、モーツァルトの故郷であるオーストリアのウィーン大学が、モーツァルト効果には証拠がないと発表しました。つまり、モーツァルト効果なるものは存在しないと結論付けたのです。ただし、「音楽を聞く」だけでは知能が発達しないことを示したもので、「音楽レッスンを受ける」ことで知能が発達する可能性を否定したものではありませんでした。近年メキシコで行われた研究では、幼いころに音楽のレッスンを受けると、子どもの脳の発達が促されたというMRI結果が出たそうです。

要するに、モーツァルトの音楽に限らず、音楽は人間の成長に役立つものであり、できれば幼いころから音楽に関わるようにすると脳の発達に良い影響を与えるかもしれないということです。そして、本人がその時に聞きたい曲を聴くことが心に対する効果であり、音楽療法の分野でいう最大の効果になるのかもしれませんが。音楽療法で大切なことは、自分が心地よいと思える音楽を使用することです。今では、人間に限らず動物や野菜にモーツァルトを聞かせると発育が良くなるとまで言われています。効果があると思えば、なんでも効果がある。難しいことは考えず、音楽を楽しめば良いということでしょうか。

そう言えば、私は年齢を重ねるごとにモーツァルトの曲を演奏することに心地よさを覚えるようになりました。もしかしたらこれこそが、私にとっての「モーツァルト効果」なのか

もしれません。

第35号 「音楽療法」

現在ではそれなりの地位を得ている「音楽療法」ですが、私が若い頃にはほとんど知られていませんでした。そもそも「音楽療法」とは何なのでしょう。

言葉だけで捉えると、音楽を使った治療法ということになりますが、医者から治療として勧められるわけでもなく、専門医が存在するわけでもありません。治療というところまでは確立していませんが、それを補う形での補完療法として効果を高めることが期待されているものだと思います。

日本音楽療法学会は、「音楽のもつ生理的・心理的・社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的・計画的に使用すること」と定義付けしています。生理的働きとは音楽を通してリラックスしたり興奮したりする状態をもたらす働きを、心理的働きとはストレスや不安を軽減する働きを、社会的働きとはコミュニケーション手段を引き出し人間関係の形成を促す働きを指します。

また、歌ったり演奏したりするなどの能動的音楽療法と、音楽を聴いてリラックスする受動的音楽療法に大別されています。最近、一人カラオケでストレスを発散する人が多いと聞きますが、これは能動的音楽療法に該当すると思います。

自分の心を落ち着かせたり、自らを奮い立たせたりするために音楽を聴くという経験は誰にでもあると思います。これは、自分の感情をコントロールするために自分が選んだ音楽を聴くという、自分の意志が能動的に働いているけれども、分類すると受動的音楽療法にあたります。たとえば、試合前にアスリートたちがイヤホンで音楽を聴いている場面をよく見かけますが、これは緊張感を自分で和らげるために好きな曲を聴いたり、感情を高ぶらせるために好きな曲を聴いたりしているのです。平昌オリンピックで羽生結弦選手は和田光司の『風～re-fly ver.～』を、小平奈緒選手はSuperflyの『Beautiful』を聴いていたとのことでした。強靱な精神力を持っているはずの超一流選手でさえ、音楽の力を活用しているということになります。

音楽の効果は昔から認められ、様々な研究がなされてきました。それが現代の音楽療法として確立したのは、第二次世界大戦後のアメリカだと言われています。戦争で身体や心に傷を負った兵士の治療のため、米軍当局が音楽療法を試みて成功を収めたことが本格的な始まりのようです。日本でも2001年に日本音楽療法学会が設立され、音楽療法の啓発・普及活動や音楽療法士の認定を行っています。まだまだ発展途上の段階と言える日本の音楽療法ですが、音楽を通して一人でも多くの方が症状を軽減し、幸せな生活を送っていただけることを願います。第33号で書いた「脳波に基づいて自動作曲を行う人工知能」の活用にも、大いに期待します。

この音楽療法の分野は、私たちが学習してきた音楽鑑賞分野とは異なりますが、音楽の力を最大限活用することは本当に素晴らしいことだと思います。

第34号 「感情」

前号で、「脳波に基づいて自動作曲を行う人工知能」について書き、この研究開発について私は、「怖い」という表現を使いました。なぜ「怖い」という感情を持ったのか、少し自己分析してみました。

音楽は、まずは作曲者（人間）が、自分の思いを楽譜という形にして表現します。次に演奏者（人間）が、作曲者の思いをくみ取りながらも自分なりの解釈を加え、自分の思いとして楽器や自分の声を使って表現します。そして音楽を聴く者（人間）が、自分の思いに照らし合わせながら聴き、作曲者と演奏者の思いを受け止めます。この三者の思いが共鳴（共感）した時、そこに感動という心の強い揺れが生まれるのです。この感動そのものが音楽の喜びです。自分を表現する喜び、表現を受け入れてもらう喜び、表現を受け入れた時の喜び。これこそが音楽を学び、音楽を楽しむ最大の魅力です。私は今まで何の疑いもなく、そう考えてきました。

しかし、「脳波に基づいた自動作曲を行う人工知能」は、私が学んできた音楽の常識を覆すものでした。

まずは音楽を聴く者（人間）のその時の感情を、脳波という目に見えるかたちで機械が測定し、感情モデルとして分類します。次に人間の作った人工知能が、感情モデルに合致した作曲ルールに基づき自動作曲します。それをシンセサイザーで音楽として流します。そして音楽を聴く者が、自分の感情に合致した曲として自動作曲された音楽を聴いて、感情をコントロールします。感情をコントロールされると言ったほうが適切かもしれません。

自分の感情を表現するために音楽を学んできた私にとって、自分の感情を機械に表現されてしまうことに対する違和感を覚えてしまったのかもしれない。今までの自分を否定されてしまうような気がして、「怖い」という感情を持ったのかもしれない。

もちろん、「脳波に基づいた自動作曲を行う人工知能」は、今後様々な分野で有効活用されていくことが考えられます。特に、医療や介護の分野では、この技術が大いに活用されることが期待されます。本当に素晴らしい開発だと思います。しかし一方で、作り手の顔を思い浮かべることのできない、作り手に思いを馳せることのない音楽が、人間にとって最も大切な感情表現にどれだけの影響を与え、どれだけの価値観をもたらすのか、人間である我々がしっかりと見守っていく必要があると感じています。

どんなに人工知能が発達したとしても、人の手による温もりを失うことだけはしたくありません。人間の感情を人工知能にコントロールされるのではなく、人間が人工知能を永遠にコントロールし続けることを願います。人工知能を作り出したのは人間なのでから。

次号では、人工知能の活躍が最も期待できる「音楽療法」について書かせていただきます。

第33号 「人工知能2」

第23号で、私は人工知能(AI)と音楽について書きました。今号は、その第2弾です。

2017年1月16日、大阪大学 Center of Innovation(COI)と科学技術振興機構(JST)が、脳波に基づいて自動作曲を行う人工知能を開発したとして、次のような発表を行いました。

『このたび、沼尾正行(大阪大学産業科学研究所教授)、大谷紀子(東京都市大学メディア情報学部教授)、クリムゾンテクノロジー(株)、ベルギーの研究機関 imec の連携チームは、楽曲に対する脳の反応に基づいて自動作曲を行う人工知能の開発に成功しました。

今後の脳マネジメントシステムは、個人の脳波の状況を検知し、それに基づいて脳の活性化手段を提供し活性化につなげると考えられており、活性化手段は音楽を提供することが有望です。しかし、現在の音楽提供システムは、過去に聞いた曲の類似曲を推薦するか、曲の特徴を細かく指定する必要のある自動作曲システムしか存在せず、手軽に音楽で脳の活性化に結び付けることが困難でした。

しかし今回、ヘッドホンと一体化した脳波センサーを開発したことで、曲に対する脳波データの収集が容易になり、収集した曲への反応と脳波の関係を機械が学習し、ユーザーのメンタル状態を活性化させるオリジナルの音楽を容易に生成することが可能になりました。作曲結果は、その場でただちに MIDI 技術によりアレンジされ、シンセサイザを用いて豊かな音色で再生されます。

以上の技術により、将来的に個人だけでなく聴衆の反応測定が可能になり、聴衆の脳波反応に基づいた作曲の実現も期待されます。また、家庭で個人の状態を脳波で測定し、個人の状態にあった音楽刺激を用いて、個人の潜在力を常に発揮できるシステムの実現が期待されます。』

以上のような記事でした。

この記事を読んだ時、私の頭の中には？マークが飛び交っていました。まず、このシステムの仕組みがわからない。人工知能が複雑な人間の感情を判断できるのか。脳波だけで本当の人間の感情が測れるのか。感情が判断できたとしても自動作曲による音楽で人間の感情がコントロールできるものなのか。人間の心はそんなに単純なものなのか。これは技術の進歩という言葉で片付けることのできる問題なのか。様々なことを考えてしまいました。確かに、音楽には人間の感情をコントロールする大きな力があります。そして、この自動作曲技術を活用すれば、その人が持っている潜在能力を最大限発揮する可能性があることも何となく理解できます。特に医療や福祉の分野においては、大きな効果が期待できるかもしれません。人間にとって効果があるのなら、大変有意義な研究開発だと言えます。でも、私が最も感じたことは、なぜか「怖い」という感情だったのです。

第32号 「聴く力と伝える力」

前号で、「聞く」と「聴く」の違いについて音楽的な側面から書かせていただきました。今号では「聴く」について、コミュニケーションという側面から書かせていただきます。

学校の重点目標において、「コミュニケーション能力の育成」という言葉がよく使われます。より良い人間関係を形成する上で、コミュニケーション能力が重要となることは当然のことです。では、コミュニケーション能力とは具体的にどのような力を指すのでしょうか。

言語によるコミュニケーションに限って言えば、「伝える力」と「聴く力」の2つになると思います。「伝える力」とは、自分の意志や考えを言葉で表現して相手に理解してもらう力のことであり、「聴く力」とは、相手の言葉を聴いて何が言いたいのかを理解する力のことです。そして、「伝える」と「聴く」が双方向にバランスよく図られている状態を、「言葉のキャッチボール」ができる状態と言います。一方的に自分の考えを伝えるだけでは「言葉のキャッチボール」ができません。相手の真意を読み取る「聴く力」が非常に重要ということです。

あるビジネス研究者によると、「聴く力」の段階を次のように分析しています。

人の発言を聴く意思を持っていない状態→人の発言を聴いているつもり状態→人の発言を自己解釈で聴いてしまう状態→相手の真意を察することができる状態。皆さんは自分の「聴く力」が、今どの段階にあると思いますか。もし自分に「聴く力」があると思っても、相手が真意を理解してくれない人だと判断したら、「聴く力」がない人だと評価されているかもしれません。

これまでの教育は、コミュニケーション能力の育成として、「伝える力」を身につけることを重視してきたと思います。しかし今後は、「伝える力」とともに「聴く力」を育てる教育を実践していく必要があります。そして、我々教師自身も「聴く力」を身につけ、生徒や保護者そして同僚等と双方向のコミュニケーションを図り、「言葉のキャッチボール」ができなければならないと考えます。

「聴」という漢字は、漢字の旁（つくり）が同じことから、徳を持って耳を傾けると言われます。また、「聴」を分解すると、耳+十（じゅう）+四+心で成り立つ、つまり耳だけでなく十四の心（諸説あるうちの一つとして「受容する心、共感する心、好意的な心、興味を示す心、肯定する心、優しい心、理解する心、ゆったりした心、誠実な心、先入観のない心、明るい心、公平な心、信頼の心、感謝の心」）を持って聴くことを表しているとも言われます。さらに、同じような分解論から、「聴」は耳+目と心で成り立っているため、耳だけではなく、目で見て心で感じる大切だと言われます。なんだか金八先生のような話になってしまいましたが、私も相手の言葉に耳を傾け、相手の心に寄り添いながら聴くことを常に意識していきたいと思います。とにかく、五感をすべて使ったコミュニケーションに、お互い努めていきたいものです。

第31号 「聞くと聴く」

リラックスしたい時や就寝する時にBGMを流す人は多いと思います。また、一人で仕事や勉強に集中したい時にBGMを流した方が、効果が上がるという人もいるかもしれません。

私は、基本的にどんな状況でもBGMを流すのは好きではありません。それは、音楽が流れていると、その音楽に集中してしまうからです。つまり、自分の脳が、音が鳴っていてもその音を意識していない時は問題ありませんが、一旦その音に意識が行ってしまうと、そればかりが気になってしまい他のことに集中できなくなるのです。私は、その音楽を聴きながら、旋律を頭の中で楽譜にしたり、コード進行を頭の中で考えたりしてしまいます。一種の音楽病と言えるかもしれません。ただ、音楽教員をしている時はまだ良かったのですが、管理職となり少しずつ音楽から離れてしまった今、正確な音をなかなか聴き取ることができない、頭の中ですぐに楽譜にできないことが増えてきました。こうなると、自分に対する苛立ちが起こり、むなしい気持ちになってしまいます。流れている音を何となく聞き流すことが私にはできないようです。

ここで、日本語の「聞く」と「聴く」の違いについて述べます。

辞書には、『「聞く」は音を感じ取る。自然に耳に入ってくる。「聴く」は聞こうとして聞く。注意してよく聞く。』と書いてあります。

つまり、意識せずに何となく「きく」場合は「聞く」を使います。たとえば、お店などで流れているBGMは多くの人の耳に入りますが、ほとんどの場合は意識しないことが多いはず。ただ単に「きく」場合は「聞く」と表記するということです。しかし、同じBGMでも好きな曲や気になる曲が流れると、耳を傾けたくくなります。このように、注意深くあるいは進んで耳を傾げる場合には「聴く」と表記します。「聴く」は、意識して対象の音を感じ取ろうとすることを意味しているのです。

私が一人の時でもBGMを流さないのは、「聞く」という行為から「聴く」という行為に自分で移行してしまうからかもしれません。こう考えると、自分は本当の意味で音楽を楽しんでいるのだろうかという疑問に思ってしまうこともあります。

話は逸れますが、私の家族は私の前で鼻歌を歌うことを嫌がります。それは、今の音程は低かったとか、調（キー）が元の曲と違うとか、少しリズムが甘いとか、私がすぐに指摘してしまうからです。ただ鼻歌を歌って楽しんでいるだけなのに、そんな注意をされたら誰だって嫌になりますよね。指摘した後は自分でも嫌になります。

最近よく考えます。自分は本当に音楽が好きなのだろうか、音楽をただの教育手段としてしか捉えていないのではないか、音楽を語る資格が自分にあるのだろうかなど。とは言え、自分には音楽しか語るものがないことも事実です。少なくとも私の家族以外には、あまり口うるさくしないように心がけます。

カンタービレ第30号 「BGM2」

前号で私は、東京メトロ車内におけるBGMを流すという試みに対し、積極的に賛成しないと述べました。閉鎖された空間である公共交通機関の中で、一人でも不快に思う人がいるとしたら、流すべきではないと考えているからです。

しかし、公共の場におけるBGMは、すでに確固たる地位を築き上げています。レストランや喫茶店などの飲食施設、スーパーマーケットなどの商業施設、そして病院の待合室やリラクゼーション施設など、BGMが流れていない場所を探すほうが難しいかもしれません。音楽の力を活用したBGMには、それだけ大きな効果があるという証明と言えます。そこで今号では、私も読んで納得した音楽心理学者であり音環境コンサルタントである齋藤寛氏によるBGMの4つの効果を紹介します。

1つ目、マスキング効果。ある音を別の音で隠す効果。たとえば、レストランなどの飲食施設で、調理場や空調の音あるいは別の客の会話を打ち消すためにBGMをかけ、耳障りな音を隠して居心地の良い空間を作るといった効果です。

2つ目、感情誘導効果。音楽を聴いて感情を動かす効果です。たとえば、病院で患者の不安を和らげるためのBGMや、映像とともに音楽を流して感情を増幅させる効果などがあります。

3つ目、イメージ誘導効果。お店の雰囲気をも明るくしたり、高級感を醸し出したり、子供向けの場所では楽しさを演出したりといったように、それぞれの場所が持つ視覚要素のイメージを、聴覚から受ける刺激で増幅させる効果です。

4つ目、行動誘導効果。感情に働きかけた結果、行動まで変えてしまうのがBGMの力です。たとえば、BGMのテンポを変えると、歩くスピードや食べるスピードが変わり、音量が大きいと声が自然に大きくなります。音楽の要素が変わるだけで人の行動は変わるということです。

私は、これらの大きな効果がBGMにはあるということを理解しています。また、音楽にはイメージや感情そして行動までも変えてしまう力があるということも、音楽を学んできた私はよく理解しているつもりです。ただ、現代においては、自然の音よりも人工的に作られた音の方が多く存在し、もしかしたら、その音・音楽に自分の感情がコントロールされているかもしれないと意識することも必要ではないかとも考えます。前号でも述べましたが、音楽を聴くということは基本的には主観的なものであり、主観的ということは、同じ音楽を聞いても異なる感情が生じるということ、音楽を流す立場の者は忘れてはならないと思います。つまり、聴く側と共有したいイメージを、流す側がしっかりと持った上で選曲や音量選択を行う必要があり、流す側のセンスが大変重要になってくるということです。

実は私は、公共の場に限らず一人で何かをしている時にもBGMを流すのは好きではありません。なぜBGMを好まないかについて、「聞く」と「聴く」の違いも交えながら、次号

で述べさせていただきます。

第29号 「BGM」

今号は、BGM（バックグラウンドミュージック）について書かせていただきます。

2018年の1月末に、次のようなニュースが流れていました。

『東京メトロは、日比谷線13000系車内でクラシック音楽などのBGM放送を試行運用することを発表しました。通勤用車両による営業列車内でBGMを放送するのは、国内初とのこと（特急列車などでは実績あり）。1月29日からの日中時間帯、一部運行で実施予定。2017年3月にデビューした新型の13000系。車内スピーカーには「高音質ステレオ放送システム」を搭載し、通常よりクリアな音質が楽しめる仕様となっています。また、この搭載された「音楽が流れる機能」は、昨年7月に誤作動という形で披露され、その音楽に心を癒された人の声上がるなど話題になりました。もともとはイベント列車の運行や、車両点検時のスピーカー試験のために導入したのですが、より快適な車内空間を演出することを目的に、当面の間試行運用し、そこからの意見をもとにBGMの有用性などを検討していくとしています。』

現在、検証した結果がどうであったかはわかりませんが、列車内でのBGMには賛否両論があるようです。賛成意見としては、「気持ち落ち着く。」「車内トラブルが減るのではないか。」「地下鉄は景色がないので、何も音がないより居心地がいい。」など。反対意見としては、「好きな音楽を聞いている人にはノイズでしかない。」「眠くなるのでやめてほしい。何のために流しているのかわからない。」「余計なことはしないでほしい。純粋に電車の音だけを聞きたい。」などです。

皆さんは、この試みに賛成ですか。それとも反対ですか。私はどちらかと言うと反対です。その場にいるすべての人に対し効果があるのなら賛成ですが、一人でも不快に思う人がいるとしたら、BGMを流すべきではないと考えています。音楽の捉え方はあくまで主観的なものはずです。公共の場なのだから、我慢しなくてはいけないことがあるのは承知していますが、それを音楽に求めることは正直反対です。

ただ、BGMを自分だけの空間において有効活用することは、大いに結構なことだと思います。それだけ大きな効果がBGMにはあるのですから・・・。

次号では、BGMの効果について取り上げさせていただきます。

第28号 「才能」

この「校長室カンタービレ」は、高校で唯一の音楽科校長である自分にしか書けないものを書きたいという思いから、私の音楽体験をとおした考え方や人生観を中心に書かせていただいています。今号では、改めて自分自身について書かせていただきます。

私が最もコンプレックスに感じていることは、本当の意味での音楽の力がないということです。音楽の才能がないと言ってもいいかもしれません。

そもそも音楽は、自分の感情を自分なりに表現する手段です。また、記号化した楽譜というものが存在しなかった時代、音楽は耳から伝わってきたものを再現し、それを後世に伝えていました。私がいつも羨ましく思うのは、楽譜がなくても音楽を聴いてその場で再現してしまう人、自分が思ったとおりのことを楽譜なしで表現してしまう人でした。残念ながら私にはそんな能力はありません。なぜあんなことが簡単にできてしまうのだろうという思いと、自分には出来ないことに対する悔しさを、常に感じていました。私が思う音楽の才能がある人とは、楽譜なしで音楽を楽しむことができる人なのです。しかし、そんな才能を持ち合わせていなくても、楽譜を読む力とそれを演奏する力があれば、それなりに音楽に携わることは可能でした。私は楽譜が存在する時代に生まれてきたことを、本当に幸運なことだと感じています。

ただ、私には努力をする才能はあったと自負しています。この努力をする力のみで、これまでの音楽人生を歩んできたと言っても過言ではありません。残念ながら年齢を重ねるごとに努力することを怠るようになってしまいましたが、若い頃にかむしゃらに努力し続けてきたという事実は、私の人生を大きく支えてくれました。そして音楽を通じて出会うことのできた様々な人や出来事が、私の成長を促してくれたことも紛れもない事実です。

発明王エジソンの名言として、「天才は1%のひらめきと99%の努力である」という言葉があります。また、大作曲家ベートーヴェンは、「努力は必ず報われる」と言いました。現在では「努力することが最も大切である」という意味で使われることが多いですが、エジソンは「ひらめきがなければ努力しても無駄である」、ベートーヴェンは「努力したものが成功するとは限らないが成功する者はみな努力している」というのが本来の意味です。私のような凡人は、天才が語った本来の意味ではなく、「努力することが最も大切である」と解釈し、そのことを信じ続けるしかありません。努力し続ける人にはどんな天才も勝てないという意味で、「努力に勝る天才なし」という言葉があります。私はこれからも、努力は人を成長させ新たな気づきを与えてくれることを信じ続けたいと思います。

第27号 「プロとアマチュア」

多くの学校の吹奏楽部は、定期演奏会を開催します。吹奏楽コンクールやアンサンブルコンテスト等の結果を求める大会とは異なり、吹奏楽部員が主体的に企画・運営をして、お世話になった皆様へ感謝の気持ちを込めて行う学校がほとんどだと思います。

さて、音楽だけではなく、どの分野にもプロとアマチュアが存在します。ただ、アマチュアであってもプロ並みの技術を持っている人もいますし、プロでもアマチュアより劣る人がいるのが事実です。では、プロとアマチュアの違いつて何なのでしょう。

よく言われるのが、その仕事で自分が生活していけるだけのお金を稼ぐことができるかということです。プロ並みの技術を持っていたとしても、それが主な収入源にならない場合はアマチュアだということです。確かに収入を伴う職業という観点からすると、そうなのかもしれません。しかし、私が考えるプロとアマチュアの最大の違いは、「結果」と「経過」のどちらに価値を求めるかということだと思っています。「頑張ってきたこと」そのものに価値があるのがアマチュアであり、「最終的な結果」を求められるのがプロだと考えます。

演奏会において、プロの場合はどのような状況だったとしても演奏の良し悪しで評価されます。演奏そのものの対価として聴衆はお金を払うのです。ところがアマチュアの場合は、演奏そのものだけではなく、その演奏に至るまでの頑張りや演奏に取り組む姿勢などを含めて、聴衆は演奏会の良し悪しを判断します。聴いている人は、奏者の頑张りを自分なりに想像して、心を動かされるのだと思います。逆に言うと、演奏する側には、こんな演奏をしたいという熱意が必要だということになります。アマチュアである高校野球を見て感動するのと同じ感覚なのかもしれません。オリンピックを見て感動するのも同様の感覚があるのかもしれません。

吹奏楽部の定期演奏会の話に戻ります。定期演奏会の主な目的として挙げられるのが、「日頃の練習の成果を発表する」や「地域の皆様に感謝の気持ちを伝える機会とする」などがあります。この点については私も同感です。ただ、単に演奏するのではなく、生徒一人ひとりの輝きや頑张りが伝わる場面が多くあると、聴いてくださっている皆様に、より多くの感動を届けることができるのではないかと思います。吹奏楽部の定期演奏会はアマチュアの演奏会であり、しかも教育活動の一環です。コンクールとは異なり「頑張ってきたこと」に価値を求められる定期演奏会を、やらなければならないという義務感で開催するのではなく、指導者や部員たちの頑张りによって学校関係者や地域の皆様から真に支持され応援されるものとなることを願います。

我々教員は、教育のプロでなくてはなりません。教育における「結果」は、そう簡単に目に見えるものではありません。何年先か何十年先かに現れる教え子たちの「最終的な結果」を信じ、日々過ごしています。

第26号 「別れの曲」

私は、音楽の授業を受け持っていた頃、普段はピアノに向かうことはなかったのに、年度末が近づいた時期にだけ、突然ピアノの練習を始めていました。それは、音楽を受講してくれた生徒たちの最後の音楽授業に、自分にしかできない授業として、毎年、ミニリサイタルを開催していたからです。年齢を重ねるごとに感じる技術の衰えと戦いつつ、ピアノという楽器の歴史と自分がガムシャラに頑張ってきた高校時代を語りながらの演奏会でした。この授業で私は、高校時代に頑張ったことがいかに自分の人生に影響を与えるかということと、何十年経ったときに自分の頑張りを自慢できるものがあることの素晴らしさを、教え子たちに伝えたかったのです。

この演奏会の最後の曲は、私が作詞・作曲した「たかが音楽、されど音楽」という曲を弾き語りしました。この曲は駄作ですのでどうでも良いのですが、ピアノ演奏の最後には必ず、ショパン作曲の「別れの曲」を演奏していました。曲名からして最後の演奏曲にはぴったりだと考え選曲していましたが、実はこの曲、正式には「別れの曲」という名称ではないのです。私の大好きな曲ですので、この曲について少し紹介させていただきます。

この曲の正式な名称は、「エチュード作品10の3 ホ長調」です。「エチュード」とは「練習曲」という意味で、作品10および作品25が12曲ずつ、計24曲あります。「別れの曲」以外にも、作品10の5「黒鍵」や12「革命」、作品25の11「木枯らし」などは特に有名な曲として挙げるすることができます。この「別れの曲」は、右手で内声部を弾きながら旋律のフレーズとレガート奏法を身に付けるための大変難しい曲で、中間部にはショパンらしい激情的な部分もあります。ショパン自身も「一生のうちで二度とこんなに美しい旋律を書くことはできないだろう」と言ったということです。

ショパンは、1810年にポーランドで生まれました。この曲が出版された1832年は、ソ連がポーランドを武力で併合した年です。当時のショパンはパリにいて、動乱の中にある祖国のことを思いながらも、自分では何もできないことに苛立ちを見せていました。自分の曲に祖国への思いを込めることしかできなかったのです。そのような状況の中で生まれたこの曲は、西欧では「悲しみ」とか「親密」あるいは「別離」と呼ばれるようになりました。これもショパンが名付けたものではありません。

1934年、ドイツでショパンの伝記映画が作られました。その日本語タイトルが「別れの曲」であり、その時にテーマとして使われた曲が、この「エチュード作品10の3」でした。そして日本でのみ「別れの曲」と呼ばれるようになったのです。映画で使われたクラシック曲がそのまま曲名として普及した例は、この曲以外存在しないと言われています。

第25号 「カノン進行」

今号はクイズです。次の歌詞は、私が様々な曲の歌詞を無理やりつなげて作った「Dream on パッヘルベル」です。歌詞を採用した曲を当ててみてください。

【歌詞】

- 1番 輝きながら かくれて思い出がいっぱい
胸に残る愛しい人よ 何から話そう笑ってほしい
笑顔咲く君とつながってたい ふとした瞬間のさりげない仕草
トランク1つだけで浪漫飛行ヘインザスカイ 忘れない忘れないあなたの笑顔
あーだから今夜だけは 守ってあげたい
この大空に翼をひろげ 君と歩き続けたいインユアドリーム
- 2番 必ず今夜なら言えそうな気がした この世界中の元気だきしめながら
あなたの夢をあきらめないで 誰かに届く明日がきっとある
負けないでもう少し アスファルトに咲く花のように
レットイットビー×4 こんなにたくさんの曲があったよ
レットイットビー×4 知らない曲もあったでしょう
君たちもこのコード進行 使って作曲したら
ヒット曲生まれメジャーデビュー 夢の印税生活できるかもね

【解答】

- 1番 ♪輝きながら(徳永英明) ♪思い出がいっぱい(H₂O)
♪YaYa~あの時代を忘れない(サザンオールスターズ) ♪正夢(スピッツ)
♪さくらんぼ(大塚愛) ♪明日への扉(I WISH)
♪浪漫飛行(米米CLUB) ♪風立ちぬ(松田聖子)
♪心の旅(チューリップ) ♪守ってあげたい(松任谷由実)
♪翼をください(赤い鳥) ♪揺れる想い(ZARD)
- 2番 ♪クリスマス・イブ(山下達郎) ♪勇気100%(光GENJI)
♪夢をあきらめないで(岡村孝子) ♪愛は勝つ(KAN)
♪負けないで(ZARD) ♪TOMORROW(岡本真夜)
♪Let it Be(ビートルズ) ♪夢見る高校生(三島祐司)

パッヘルベル(1653~1706年・ドイツ)が作曲した有名な曲に、「3つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノン」という曲があります。カノンとは複数の声部が同じ旋律を追いかけて演奏する様式の曲のことで、輪唱と言えはわかりやすいかもしれません。この曲は、2小節ごとに同じコード進行(D→A→Bm→F#m→G→D→G→A)をひたすら繰り返します。このコード進行は「カノン進行」と呼ばれ、300年以上も前に作られたにもかかわらず、現在のJ-POPでもたくさんの曲に部分的に使われています。「Dream on パッ

ヘルベル」は少々強引な部分もありますが、私が生徒に創作への興味・関心を持ってもらうために準備した曲で、弾き語りをするとう喜んで聞いてくれました。

他にもカノン進行を使っている曲はたくさんあると思います。皆さんも調べてみてはいかがでしょう。結構楽しい作業でしたので、お勧めします。

第24号 「非認知能力」

前号では人工知能について書きました。この人工知能の進歩によって、人間の領域とされてきた「認知能力」を必要とする幅広い分野の仕事を、人工知能が代行できるようになっています。この認知能力の分野では、人間が人工知能にはかなわない日が、すでに来ているのではないかと感じます。

「認知能力」とは、簡単に言うと「テスト等で数値化できる知的能力」のことです。それに対して、認知能力ではないという概念で「非認知能力」という言葉があります。欧米では「社会情動的スキル」と呼ぶそうです。

「非認知能力」とは、「物事をやり抜く力・やる気・根気・リーダーシップ・協調性・創造力・自制心・対応力などの数値化できない力」を表します。つまり、「目標に向かって頑張る力」「他者とうまく関わる力」「感情をコントロールする力」であり、「生きる力」そのものと言えるかもしれません。近年、この「非認知能力」をどう育てるかということが、学校教育における重要課題と言われるようになりました。もちろん「認知能力」を育てることは大切ですが、それとともに「非認知能力」を育てることによって、人間が自分らしく生き抜き、自らの成長を支え続けることにつながるという考え方です。

もちろん、これまでの教育においても、「非認知能力」は重視されてきました。ただ、「非認知能力」はその子が持っている気質や性格と深く関係していると捉えがちだったことも事実です。これからは、「非認知能力」は教育によって育てることができるという意識を持つことが大切になってくるのです。

新学習指導要領では、新しい時代に必要とされる資質・能力を、①知識・技能（何を理解しているか、何ができるか）、②思考力・判断力・表現力等（理解していること・できることをどう使うか）、③学びに向かう力、人間性等（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）の3つの柱としています。①②が「認知能力」、③が「非認知能力」に該当するのかもしれません。

私も会員である島根県高等学校音楽教育研究会（高音研）では、①感じ取る力（音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る力）、②表現する力（音や音楽を聴き取り、感じ取ったことを生かして音楽表現する力）、③創造する力（思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力）、④学びあう力（音や音楽への主体的な関わりを基盤に、他者と協働しながら学び深める力）、⑤自他尊重の力（我が国や郷土の伝統音楽をはじめ、多様な音楽文化の価値やよさを深くとらえる力）の5つを、音楽を通して育てたい力として定めています。デジタル化が進む現代だからこそ、音楽でなければ伝えることのできないもの、音楽の教育的価値について、もう一度確認していかなくてはならないと考えます。現在は音楽の授業を担当できない立場となった私は、「音楽を教える」から「音楽で育む」ことを大切にしたい今後の音楽教育に、大いに期待しています。

第23号 「人工知能」

2017年に一躍話題となった人に、将棋の藤井聡太氏があります。ひふみんこと加藤一二三氏とのデビュー戦で勝利以降、29連勝という大記録を打ち立てました。史上最年少でプロ棋士となった藤井棋士は、もちろん才能があったことは間違いありませんが、コンピューター将棋ソフトを使って力を付けたとも言われています。

そして、将棋人工知能「ポナンザ」が、「電王戦」で現役の将棋名人を次々と破り、もはや人間では勝てないとまで言われるようになりました。この人工知能と呼ばれているものは、一体どこまで進化し続けるのでしょうか。

人工知能（Artificial Intelligence…AI）とは、厳密な定義は確立されていないようですが、記憶や学習などの人間の知的な活動をコンピューターに肩代わりさせることを目的とした研究や技術のことだそうです。あるデータによると、20年後には人間の職業の約半分を、人工知能あるいは人工知能を備えたロボットが代行すると言われています。

過去の技術的進歩とは、たいていは身体を使う作業を機械化することを指していましたが、現在の技術的進歩は、これまで人間の領域とされてきた認知能力を必要とする幅広い仕事を機械化することを意味するようになりました。人とのつながりが必要な仕事や、アイデアを出していくクリエイティブな仕事は、機械では代行できないと言われてきましたが、まさに創造性と感性が必要とされる音楽の分野はどうなのでしょう。

近年の音楽分野における人工知能は、著しく進化しています。2015年、ケンブリッジ大学出身のクリエイター集団によって、「ジュークデッキ」というサービスが公開されました。これは「ジャンル」「曲調」「曲の長さ」を指定すると、オリジナルBGMを作曲してくれるというサービスです。そして昨年、パリのソニーコンピューターサイエンス研究所が、1万3千曲のデータを解析してユーザーが指定したスタイルで自動作曲する音楽ソフト「フロマシーズ」を使い、ビートルズ風の曲「Daddy 's Car」を発表しました。さらに、「音楽の父」と呼ばれているバッハの理念に基づいて作曲を行う「ディープバッハ」を発表しています。私も聴いてみましたが、バッハが作曲した本物の曲なのか、AIによるバッハ風の曲なのか、恥ずかしながら完璧には区別できませんでした。

人工知能自体が人間と同じようなひらめきや感性を持ち、自らのインスピレーションによって本当の自作曲を生み出すようになるまでには、まだ時間がかかるかもしれませんが、2001年に公開されたスピルバーグ監督の映画「AI」のように、人の心を備えたロボットが生まれ、人間との共生社会を構成する日が、いつかは現実のものとなるかもしれません。その時、我々人間の存在意義、そして音楽の存在意義は、どう変化しているのでしょうか。楽しみでもあり怖くもあります。

第22号 「音楽の三要素」

メロディー（旋律）、ハーモニー（和音）、リズム（律動）、これを音楽の三要素と呼んでいます。

メロディーは、音の高さが様々に変化しながら進行していくことです。

ハーモニーは、複数の音が重なり合いながら変化し、進行していくことです。

リズムは、音の時間的な長さが一定の規律・パターンに従って進行していくことです。

ここで大切なのは、進行していくこと、つまり時間とともに変化するということが音楽であるということです。ほとんどの場合、瞬間的に鳴った場合は音として処理します。しかし、その音の変化を伴いながら進行していった場合、人間はそれを音楽としてとらえるのです。

ただ、音の三要素と音楽の三要素がまったく同じものであったとしても、奏でる人あるいは聴く人によって感じ方が異なります。物理的には計測できない「心」「心の揺れ」「共感」「感動」というものが人間にあるからです。そして、ある人にとっては騒音としか聞こえないものでも、別の人にとってはそれが音楽となる場合もあります。「うるさい」と感じるのか、「心地よい」と感じるのかは、人によって違うのです。

かの有名なビートルズも、デビュー当時は「あんなうるさいものは音楽ではない。騒音だ。」とイギリスの紳士たちから眉をひそめられていたそうです。そして、1966年6月30日から7月2日に行われた日本公演では、日本武道館で開催することに対し、「神聖なる武道の精神を汚される」と大反対にあったと言われています。当時は、ビートルズを不良集団とみなし、ビートルズが奏でるロック音楽を騒音とみなしていた人が多かったということです。当然のことですが、音楽も時代によって変化していきます。今、前衛的と思われる音楽も、そのうち古い音楽と呼ばれるのかもしれませんが。

20世紀のドイツを代表する作曲家であるパウル・ヒンデミットは、「受け入れる心になるまでは、音楽も意味のない騒音に過ぎない。」という言葉を残しています。

音楽に限らず、人間としての成長に欠かせない「受け入れる心」。他者に言うのは簡単だけど、自分に置き換えるのは難しい「受け入れる心」。この「受け入れる心」を持つために、人間は様々な人に出会い、様々なことに挑戦し、失敗と成功を繰り返していくのだと思います。無駄だと思ってもやり続けること、無理だと思っても挑戦すること。常に「ひと・もの・こと」との出会いを大切にし、そこから様々な価値観を学び続け、「受け入れる心」を持って初めて開ける世界があるのだと思います。私にもまだまだ知らない世界がたくさん存在している、というか知らない世界の方が多いのでしょうかね。

第21号 「音の三要素」

前号では、「無音の音楽」について紹介させていただきました。今号では再度、音について書かせていただきます。

音には3つの要素があります。音の大きさ、音の高さ、そして音色です。

音の大きさは振動の大きさで表します。単位としてはデシベル（db）が使われます。例えば、飛行機のエンジン音は120db、普通の会話は60db、ささやき声は30db、蚊の羽音は20dbとされています。

音の高さは周波数で表します。単位としてはヘルツ（Hz）が使われます。人の耳で聴くことができるのは、一般的に20Hz～20,000Hzとされています。ただ、人間は年齢を重ねるに従い、高い周波数の音が聞き取りにくくなるようです。若者が深夜に店の前でたむろすることを防ぐため、約17,000Hzの「モスキート音」と呼ばれる高周波音を使って退散させるというニュースを見たことがあります。私にはもう聴こえないのでしょうか。また、音楽では「ラ」の音＝440Hzを基準周波数として決めています。オーケストラの演奏会で、団員がステージに登場し、最初にチューニングを行います。その時はこの基準周波数である「ラ」の音を鳴らしているのです。ちなみに、赤ちゃんの産声は440Hzで「ラ」であるなどという説もあり、真面目に研究した人もいるそうです。

最後に音色です。音色の違いは波の形（波形）の違いです。例えば、同じ「ラ」の音であっても、ピアノとトランペットではまったく違う音色として聞こえてきます。大きな波形の中にある小さな揺れが、様々な音色を作り出しているのだそうです。

以上が音の三要素と言われているものですが、ここで、音に関する不思議な現象を2つ紹介します。

まずは、救急車のサイレン音に関する不思議です。救急車が近づいてくる場合は高く、遠ざかっていく場合は低く聞こえます。有名な「ドップラー効果」と言われるものです。音でいうと、「シーソーシーソー」から「シソーソーシソーソー」と、半音程度下がります。これは、近づく音は押し縮められて波長が短くなり周波数が高くなる、そして遠ざかる音は引き延ばされて波長が長くなり周波数が低くなるから起こる現象です。

もう1つは、自分の声の不思議です。皆さんは自分の声を録音して聞いてみたことがあるでしょうか。おそらく「これが自分の声？なんか違う！」と感じると思います。これは、自分の脳には喉から振動が直接届き、それを自分の声と判断しているからです。空気を介して聞こえる声とは異なっているのです。どちらが本当の自分の声なのでしょうか。

次号では、「音楽の三要素」について書きたいと思います。

第20号 「無音の音楽」

さて前号では、音は「振動」であり、空気などを介して耳に届くと書きました。では、空気のない宇宙空間では音は聞こえないのでしょうか。基本的には、振動を伝える空気が存在しないから聞こえないそうです。映画に出てくるド派手な音は、実際の宇宙空間では生じないらしいのです。

私は、本当の無音状態を経験したことはありません。今の私には、音のない世界は想像できません。そして当然ですが、音楽は楽器や声を使って音を出し、それを聴く人の耳に届けます。でも、その常識を覆す作曲家が存在しました。それがアメリカのジョン・ケージという作曲家です。彼は、20世紀で最も影響力のある作曲家と評されています。

1951年、ケージはハーバード大学の無響室（周りの音を完全に遮断し、室内で発生する音も完全に吸収して無音状態にした部屋）に入るという経験をしました。その時彼は、完全に無音であるはずの空間で2つの音（神経系が働いている高い音と血液が流れる低い音）が聴こえたそうです。無音の世界においても音はどこまでも人を追いかけてくることに、ケージは相当な衝撃を受けたとされています。

そして1952年、「4分33秒」という曲を完成させました。

この曲は全3楽章で構成されています。ところが楽譜には、それぞれの楽章にT A C E T（比較的長い休み）と記されているのです。つまり、4分33秒の間、1つの音も発せられることなく曲が終了するのです。実際に、同年8月、ピアニストのデヴィッド・チュードアによって初演され、当時は様々な批判を浴びたとされています。

正直言って私には理解し難い世界ですが、音楽に関する新しい概念を創造したとして評価を得ているのも事実です。

ケージはこの曲について、4分33秒間の「無音」を聴くのではなく、4分33秒間の静寂な演奏会場で聴こえる人の呼吸やざわめきなど、普段は全く意識しない音に心を向けさせることを意図したと言っています。そして、会場内で起こる雑音も含めたすべての音が1つの音楽であり、演奏者ではなく聴く人を主人公とした音楽なのだと言っているのです。

ちなみに、なぜ4分33秒かというと、絶対零度（分子がまったくエネルギーを持っていない状態となる理論上の温度）がマイナス273度であり、4分33秒を秒数に直すと273秒となる、という説もあります。絶対零度の意味さえ私には理解できませんが、ケージがこのことを狙っていたかどうか、まったく不明だそうです。

今回は、音楽は音を鳴らすという常識を覆した「無音の音楽」について紹介させていただきました。

第19号 「音の正体」

前号で、自然界および人工的な音も含め、この世界には音があふれているという話をしました。耳を傾けなければ聞こえない音、聞きたくなくても聞こえてきてしまう音、様々な音が存在します。さらには、超音波などという言葉もありますが、我々人間には聞こえない音も存在しています。

そもそも、音って一体なんなのでしょう。私は音楽を勉強してきましたが、この点についてはあまり深く考えたことがありませんでした。今回、少し勉強してみましたので、できるだけわかりやすく音の正体について書いてみたいと思います。

ある解説によると、音とは、空気の中に圧力が平均（大気圧）より高い部分と低い部分ができ、それが波（音波）として伝わっていく現象であるとして書いてありました。例えば、手をたたくと「パン」という音がします。たたいた手の周りの空気が押され、周りより圧力の高い部分（密の部分）ができ、この密の部分となりの空気を押します。一方、圧力が高くなった密の部分の間には、空気がまばらで圧力が低い部分（疎の部分）ができます。このようにして密の部分と疎の部分が生まれ、伸び縮みするように空気中の波（疎密波）として次々に伝わっていくのだそうです。難しいですね。

つまり音とは、「振動」なのです。音を発生するもの（音源）が振動を起こし、その振動が空気などを伝わり、我々の耳に届くのです。そして耳の中の鼓膜が振動して、その振動が脳に伝わり、脳が音として判断するのです。振動が伝わるのは空気だけではなく、水などの液体や金属・木などの固体も、振動は伝わります。逆に言うと、真空状態で振動を伝えるものがなければ、無音であるということになります。やっぱり難しいですね。

ちなみに、空気中を伝わる音の速さは毎秒約340メートル、水中では毎秒約1500メートル、鉄は毎秒約5950メートルだそうです。空気中が一番遅く、鉄が最も速く伝わるらしいです。駅のホームで、遠くの列車の音が線路からカタカタと聞こえるのは、音が伝わる速さの関係だったんですね。

ちなみにもう一つ、光が伝わる速さは何と毎秒約30万キロメートルだそうです。空気中を伝わる音が毎秒340メートルですから、桁違いの速さです。だから遠くで雷が生じたとき、ピカッという稲光のあと何秒もしてからドンという音が聞こえてくるのです。幼いころ、周りの大人から聞いたように、光と音がほぼ同時の場合は、近くに雷が落ちた可能性があるということです。

この音の正体が理解できたからと言って、音楽の学びにどうかしていけば良いか定かではありませんが、音の不思議、自然界の不思議、さらには人間の不思議というものを感じてしまいます。特に、同じ音であっても人によって感じ方が違う人間の不思議さを改めて感じます。理論ではなく感じ方が異なる人間、ここに音楽が存在する意義があるのかもしれない。

第18号 「サウンドスケープ」

自然界にはたくさんの音が存在しています。例えば、波の音、川のせせらぎ、雨の音、風の音、葉のざわめき、鳥や虫の声など。しかし、これらの自然界の音は、車の音、列車の音、飛行機の音、工事の音、テレビの音、様々な電子音などの人工的な音が満ち溢れている現代では、あえて意識しなければ気づかない場合もあります。

皆さんはサウンドスケープという言葉聞いたことがあるでしょうか。

サウンドスケープ (Soundscape) とは、1960年代終わりにカナダの作曲家マリー・シェーファーによって提唱された概念で、「音風景」と訳されています。Landscape (風景) と Sound (音) の造語ですが、風景には音が欠かせないという考え方で、視覚中心にとらえがちな風景に対し、自然界の音や人のざわめき、そして人工の音も含めた、あらゆる環境音を1つの風景としてとらえようとする概念です。

私も正直言って概念的なことはよく理解できていませんが、年度の最初の音楽授業でこのサウンドスケープという活動を行っていました。自ら音を発することを禁じ、周りの音を聴いてみるという活動です。当然、学校の環境や時間帯によって聞こえてくる音が異なります。車の音しか聞こえないときもあれば、鳥の鳴き声しか聞こえないときもありました。そして、あまりに静かすぎて時計のカチカチという音しか聞こえない場合もありました。ただ、ほんの数十秒の活動にも関わらず、新たな発見に驚きの表情をみせる生徒もいました。普段何気なく過ごしている生活の中では聞き逃している音が存在していること、人間は意識を集中させることによって初めて聞こえる音があるということなど、様々なことを感じる事ができたようです。そして、人間の能力ってすごいなと感じた生徒がいたことは、授業を行う者として頼もしく感じました。

物事は一つの方向からだけ見続けていると本質を見落とすことがあります。視覚だけで物事をとらえるのではなく、聴覚も含めた五感を使って物事を判断することが大切です。物に限らず、人間、他者に対する見方もまったく同じことが言えるのではないのでしょうか。出会った時の第一印象はとっても大切で、その後の人間関係を形成する上で重要なポイントとなることは間違いありません。しかし、付き合いを重ねていくと、その人の様々な部分が見えてくるはずで、しかも、その人を見る視点を変えてみることで、違う一面を垣間見ることが出来るはずで、

これから社会に出ることになる若者たちには、様々な角度から様々な視点で物事を見ることのできる人間になってもらいたい。そして、自分の強みをいかしながら、他者が弱みを見せたとき、それを助け、支え合うことのできる人間になってもらいたい。自分の能力に対し自分で限界を設けず、他者に対しては先入観や偏見をもたず良いところを見つけてあげられるような人間になってほしい。私は、心の底からそう願っています。

第17号 「この子らを世の光に」

第13号から16号まで、全盲の世界的ピアニストである辻井伸行さんについて書かせていただきました。

今回は、直接的には音楽に関係しませんが、前号からのつながりで「共生社会」について、ある言葉から考えてみたいと思います。

ある言葉とは、「障害者福祉の父」と呼ばれた糸賀一雄さんが1965年に書いた本のタイトル「この子らを世の光に」です。「この子ら」とは、障がいをもつ子どもたちを表します。

糸賀さんは、1914年に鳥取市に生まれました。旧制松江高校（現島根大学）を経て、京都帝国大学（現京都大学）を卒業。1946年に戦災孤児と知的障害児のために近江学園を創設しました。死の間際まで、壇上で「この子らを世の光に」と訴え続け、1968年の講演中、心臓発作により54歳で亡くなりました。「この子らを世の光に」は、戦後の障害児教育（現特別支援教育）の指針となりました。

皆さんは、2016年7月に神奈川県相模原市で起きた障害者殺傷事件を覚えていらっしゃいますか。施設に男が侵入し、19人を刺殺するという大変悲惨な事件でした。「障害者は生きていても仕方ない」という犯人の言葉は、社会に大きな衝撃を与えました。この事件後、改めて「この子らを世の光に」がクローズアップされたのです。

「この子らを世の光に」と「この子らに世の光を」の違いを考えてみてください。「を」と「に」が逆転しただけですが、全く違う意味になるはずですよ。

「この子らに世の光を」ですと、障がいをもつ子どもたちを保護されるべき哀れみの対象と捉え、みんなで光を与えてあげようという意味になります。

「この子らを世の光に」は、障がいをもつ子どもたち一人一人が輝く存在であり、その存在が社会に光を照らすという意味になります。

糸賀さんは、「弱者こそ社会を形成しているのだ。」と言っています。弱者がいる世界は当たり前であり、お互いに共存することが当たり前なことなのです。強者だけの世界は存在し得ません。あらゆる存在が絡まって、助け合い、高め合い、共存していくことこそ、「共生社会」の本当の意味となるのです。

糸賀さんは、障がいをもつ子どもたちの生活の中に、「より自分らしくあろう」「より良く生きよう」という自己実現の意欲を見ました。それは、健常者と変わらないどころか、健常者よりもひたむきな、それぞれの個々のかたちでの「生」への歩みであると感じました。つまり、障がいをもつ子どもたちこそが光を放ち、社会を形成して輝かせる存在なのだというのを、「この子らを世の光に」という言葉で表現したのです。

社会を形成するのは我々一人一人です。私は今、「この子らを世の光に」という言葉の意味を、改めて自分の心に問いかけています。

第16号 「盲目のピアニスト4」

辻井伸行さんは、インタビューの中で次のようなことを語っています。

「音楽には国境がないように、障がいも関係ないと思っています。障がいがあるから特別な音が出せるとか、そういうふうに思ったことはなくて、一人のピアニストとして聴いていただきたいなって思っています。」

皆さんは障がいを有する人たちに対して、かわいそうだとか大変だなと感じていませんか？そのように思うことは自然なことかもしれません。でも、そのことに対して偏見を持ったり、差別をしたりすることは絶対にあってはならないことです。

人によって幸せの感じ方は違いますよね。幸せの定義って何なのでしょう。周囲からは気の毒だなと思われていても、本人はそう感じていないことはたくさんあります。周囲から幸せだなと思われていることでも、実は本人はそう感じていないことがあるかもしれません。

大切なのは、自分の置かれている環境の中でいかに精一杯生きているか、自分らしく生き抜くためにいかに努力を重ねているか、ということではないでしょうか。このことは障がいの有無には関係ありません。一人の人間として追求し続けなければならぬことだと思います。

辻井さんは、自分を特別扱いせず一人のピアニストとして音楽を聴いてほしいと言っています。彼のこの言葉は、本当に深く、重いものを感じます。そして、自分は努力してきたという自信があるからこそ、この言葉を発することができるのではないかと感じています。

辻井さんは、次のようにも語っています。

「お母さん、僕は目が見えない。でもいいよ、ピアノが弾けるから。」

障がいを有する人たちに対し、様々な支援を行うことは必要です。どう支援するかを考えるのは、とっても大切なことです。ただ、その思いの中に、かわいそうだからこうしてあげるとか、こうしてあげると人助けになるでしょうとかいう、「してあげる」という考えをなくしていかないと、本当の意味での共生社会は築けないと考えます。

近年、高等学校における特別支援教育の取組が話題になっています。私は、支援が必要な生徒に適切な支援を行うことはもちろんのこと、この教育を通して、障がいの有無にかかわらずすべての人が明るく自分らしい人生を送ることができる社会、共に学びあい高めあっていくことができる社会になるべきと考えています。それも敢えて行動するのではなく、当たり前前に、自然にできるように・・・。

第15号 「盲目のピアニスト3」

全盲の辻井伸行さんは楽譜を見ることができません。そして鍵盤の位置を目で確認することはできません。そんな伸行さんがどうやってピアノ曲を弾くことができるのか、皆さんは不思議に思いませんか？私もそう感じたので、実は目を閉じて弾いてみたことがあります。結果は、まったく弾くことができませんでした。特に、音が跳躍する部分は鍵盤を見てもはずしてしまうのに、目で確認せずに弾きこなすなんて神業としか思えません。

伸行さんは、6歳から大学に入学するまで、ピアニストであり東京音楽大学講師の川上昌裕さんに師事しました。川上さんが初めて伸行さんに会ったとき、まだ6歳にもかかわらず、自分の演奏をスラスラとまねる伸行さんを見て、「なんて耳がいいんだ」と思い、二人三脚でやってみようと思ったそうです。

まず、楽譜は当然読めないで、右手と左手のパートに分けて録音した「譜読みテープ」を作って聞かせたそうです。ただ、録音するのに膨大な時間がかかってしまい、相当な苦労があったようです。しかし、これが耳の良い伸行さんにはぴったりの勉強法で、伸行さんはメキメキと実力をつけていったのです。

その後、17歳でショパン国際ピアノコンクールに挑戦し、審査員批評家賞を受賞するまでに成長しました。

上野学園大学に入学してからは、演奏家としても指導者としても超一流の横山幸雄さんに師事し、20歳の時に、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで日本人として初の優勝者となったのです。

このような著名なプロから教わるということも、一般人ではなかなかないことではありますが、様々な人による試行錯誤から生まれた的確な支援・指導と、何と云っても本人の並々ならぬ努力によって、今の辻井伸行さんが存在しているのです。

伸行さんのピアノ演奏の批評として、「ミスタッチが多い」などと書かれることもあります。でも、彼にしか奏でることのできない音楽、彼の内面から湧き出る音楽、これに共感したとき、我々は感動を覚えるのでしょうか。

伸行さんはインタビューの中で、次のようなことを語っています。

「ショパンですとかベートーヴェンですとか、今生きているわけではない人たちの作った曲を演奏するときは、イメージを楽譜から読み取るしかないですね。どんな気持ちで書いたのかなと、自分自身でイメージを膨らませて演奏することしかできませんが。」

「音楽は楽しいのが一番ですが、ピアニストは一人で弾く機会が多い仕事ですから、自分自身との戦いでもあるし、常にベストな演奏ができることを目指しています。お客様にいい音楽を届けることを心がけています。」

そして、「ピアノは僕の生活の一部で、なくてはならないもの。どんなときにも一緒にいる。長年ともに人生を歩んできた良き友です。」とも語っています。

第14号 「盲目のピアニスト2」

盲目のピアニスト辻井伸行さんは、産婦人科医の辻井孝さんとフリーアナウンサーのいつ子さんの間に生まれました。

伸行さんのピアノとの最初の出会いは、2歳の時に買ってもらったおもちゃのピアノでした。クリスマスに母親がシングルベルを歌いながら料理を作っていると、2歳の伸行さんはその歌に合わせておもちゃのピアノで伴奏していたそうです。しかも、歌にしっかり合った伴奏になっていたというから驚きです。

小さいころから非凡な才能を見せていた伸行さんですが、彼を世界的ピアニストとして育てるためには、多大な苦勞と努力が必要だったことは間違いのないと思います。それを一番に支えたのが母親のいつ子さんでした。

生後間もなく、伸行さんの目が一生見えないと知った母親は、「生まれたときからこんなハンディを抱えて、それでも伸行は生きているほうが幸せなのか。」「もう毎日がつらい。何をしていてもつらい。」と、当時の日記に書いて泣いていたそうです。

しかし、「母親である自分がこんなことでは、自分も子どももダメになる。」と思い直し、前を見て生きることを決意しました。そんな時、視力障がいのある福澤美和さんのエッセイ『フロックスはわたしの目』という本に出会ったそうです。

福澤さんは全盲であっても、歌舞伎を楽しんだり博覧会や美術館にも出かけたりすることを知ったいつ子さんは、「見えないということにとられるあまり、普通の人がやるようなことはできないと思い込んでいて、その人らしく生きていくということにまで気が回らなかった自分。」に気づきました。「全盲であっても、会場のおいや音や雰囲気などは全身で感じられるので、決して真っ暗闇の世界ではない。」と、福澤美和さんの言葉で気づくことができました。それからは、伸行さんを「障がい者の伸行」ではなく、「目の見えない個性のある伸行」として育てるようになったということです。

いつ子さんは、何がなんでも息子を「音楽家」にしようなどとは考えていませんでした。ただ、「何か一つ、この子が自信を持てるものがあれば」という願いで、ピアノの練習に励む伸行さんを後ろから応援してきたそうです。

このような母親の存在が、伸行さんの成長を支えてきたことは間違いありません。私も二人の子を持つ親として、考えさせられることが多々ありました。というか、反省させられることばかりです。今さら反省しても遅いのですが…。

次号では、楽譜や鍵盤を見ることさえできない伸行さんが、どうやってピアノ曲を習得してきたかについて、紹介したいと思います。

第13号 「盲目のピアニスト」

皆さんは、辻井伸行という盲目のピアニストをご存知ですか？今号から当分の間、辻井さんについての話をさせていただきます。

まずは、辻井さんの略歴を紹介します。

1988年9月13日生まれ、現在28歳。出生時から眼球が成長しない「小眼球」と呼ばれる原因不明の障がいを負っていた。

1995年、全日本盲学生音楽コンクールピアノの部で第1位受賞。

1998年、三枝成彰スペシャルコンサートにおいて鮮烈なデビューを飾る。

1999年、全国PTNAピアノコンペティションD級で金賞を受賞。

2000年、第1回ソロリサイタルをサントリーホール小ホールにて開催。

2002年、佐渡裕ヤングピープルズコンサートに出演。

2005年、第15回ショパン国際ピアノコンクールにて「ポーランド批評家賞」を受賞。

2009年、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで、日本人として初の優勝者となる。

2013年、日本ショパン協会賞を受賞。

幼少のころから現在に至るまで、様々な演奏会やテレビ番組に出演し、奇跡の盲目天才ピアニストと呼ばれている。また、映画「神様のカルテ」の音楽等、作曲も手掛けている。

以上が辻井さんの略歴です。

日本を代表する世界的指揮者である佐渡裕さんは、当時中学1年生だった辻井伸行さんのピアノ演奏をテープで聞いて衝撃を受け、すぐに辻井さんと連絡を取り、実際に生で演奏を聞かせてもらったそうです。その時の佐渡さんの感想を紹介します。

初対面の時に、いきなり「弾いてよ」と頼んだときもそうでした。彼のキラキラした音が飛び出してきた。まるで伸行くんにだけスポットライトが当てられているようにすら感じたものです。演奏を聴きながら涙が止まらなかった。彼についている音楽の神様が姿を現したような瞬間でした。

佐渡さんは相当な衝撃を受けたことが伺えます。私は辻井さんの演奏を生で聴いたことはありませんが、テレビで最初に見たとき、「すごい！目が見えないのに、なぜこんなことができるの？」という、驚きしかありませんでした。でも、こんな薄っぺらな言葉では語るこのできない、もっと深いものがあるのですよね。ピアノを学んできた者として、この程度のことしか感じるこのできない私を反省しました。

次号からは、辻井伸行という人間そして彼の音楽について、もう少し掘り下げてみたいと思います。

第12号 「吹奏楽コンクール」

私は、島根県吹奏楽連盟理事長という役職を拝命しています。その関係で、吹奏楽関連行事には基本的にすべて運営側として関わります。

特に、夏の吹奏楽コンクールは、小学校・中学校・高等学校・大学・職場一般の各部門があり、吹奏楽を愛好する者にとっては最大の行事で、最大の目標となっています。1年間の思い・努力・成果を、本番での短い演奏時間（小編成は7分以内、大編成は12分以内）で発表しなくてはなりません。ある意味、この本番のみで1年間の評価が決まってしまうという非常に残酷な大会とも言えます。だからこそ、そこにドラマや感動が生まれ、さらには熱心な吹奏楽ファンを巻き込んだ熱い大会となるのです。

私は大会期間中、審査員対応としてほぼ全ての演奏を審査員席近くで聴かせていただきます。圧倒的なサウンドを持っている団体、一人ひとりの技術不足をカバーする指揮者の音楽性を感じる団体、指揮者と演奏者の温かい関係を感じた団体、そして学生とは思えない完璧な演奏を行った団体など、様々な演奏があります。私は演奏を聴いている間、自分が本番で指揮をしていた当時の演奏や、本番までともに頑張ってきた教え子たちの顔や表情などを思い起こします。もう一度指揮を振ってみたい、もう一度生徒とともに音楽を作り上げたい、部活動を通して子どもたちと一緒に成長していきたいという熱い思いが湧くと同時に、あの頃にはもう戻れない、戻ったとしても自分の力では完璧な演奏なんて無理という諦めの思いも湧きます。どちらにしても、若干の寂しさを感じてしまうのが正直なところです。

人は、「ある瞬間」の自分の輝きを常に夢見て生きているのかもしれませんが、「ある瞬間」をより良いものにするために、より満足できるものとするために、日々努力を重ねるのかもしれませんが、その「ある瞬間」がたとえ満足のいくものでなかったとしても、そこに至るプロセスにおいて、人間は成長していくのではないかと考えています。そこに部活動の意義があるのではないのでしょうか。

吹奏楽に限らず、部活動が生徒たちにとって最も思い出深く、最も成長したと実感できる活動となることを願います。そして、長い人生の中で、いつ訪れるかわからない、でも何度か訪れることになる「ある瞬間」を輝かせるためにも、今生きているこの時、「この瞬間」を、大切にしてもらいたいです。

第11号 「調和」

アンサンブルにおいて「合わせる」という作業は、当然行わなければなりません。たとえ一人一人の演奏技術が優れていたとしても、「合わせる」という作業を怠ったアンサンブルは、聴いている人に何の感動も与えませんし、何と云っても奏者本人が楽しくありません。同じ時間・空間を共有しているだけで、本当の意味でのアンサンブルとは言えないのです。では何を手掛かりに合わせればよいのでしょうか。

前号で書いた良いアンサンブルあるいは良いアンサンブル演奏とするためには、言葉によるコミュニケーションと言葉によらないコミュニケーションが必要となってきます。

練習中は、音楽表現や演奏の仕方について、言葉によるコミュニケーションを行います。ただ、この過程で人間関係が壊れてしまうことがあります。

演奏中は言葉によるやり取りはできません。そこで使われるのが言葉によらないコミュニケーションです。

例えば、呼吸を合わせる。息を吸うときに発する「スーッ」という音や体の動きは、特に音の出だしを合わせるときに重要となります。息を吸うタイミングが揃っていないとバラバラな出だしになってしまいます。

次にお互いを見ること。アイコンタクトというものです。出だしやフェルマータの後、テンポが変化するときなどは、このアイコンタクトが特に重要です。

体や楽器の動きに注意すること。あまり極端な動きをするのは個人的には好きではありませんが、音楽表現をお互いに共有する点では重要となります。聴いている人へのアピールにもつながります。

表情を豊かにすること。楽器を演奏しながら表情を変えるのは難しいかもしれませんが、ちょっとした表情の変化でお互いの気持ちを感じ合うことができます。

お互いの音を聴き合うこと。当然ですが、これがアンサンブルの基本です。

このようなコミュニケーションを取りながら、1つの音楽を共に作り上げていくことがアンサンブル活動だと思います。ただ、アンサンブルを行うのは機械ではなく人間です。人間が集まれば、その人数分の感性や価値観そして人生があります。当然、対立することもあるでしょう。その時に、対立したままの状態にするのか、お互いが納得するまで話し合いを続けるのか、あるいは、自分の意見を無理やり通そうとするのか、対立をおそれ自分の主張はまったくせずに妥協のみで終えてしまうのか。この対処の仕方、本当の意味での良いアンサンブルになるのかが決まると思っています。

良好な人間関係を保つということは、簡単なことではありません。逆に大変困難で苦労することです。アンサンブル活動においても、集団生活・社会生活においても、お互いの違いを認め合い、歩み寄り、「調和 (ensemble)」させることが、大変重要なことだと考えます。

第10号 「アンサンブル」

今回は前号に関連して、アンサンブルについての話です。

アンサンブル(ensemble)とは、フランス語で「統一・調和」を意味します。服飾関係では、組み合わせて着ることを意図してデザインされた服のことを指します。音楽の世界では、2人以上の人数で演奏する合奏・合唱あるいはそれを演奏する団体の意味で使われます。

高校の音楽系部活動である吹奏楽や合唱は、学校によって人数の差はありますが、すべてアンサンブルにあたります。

吹奏楽指導者である佐藤正人氏は、良いアンサンブルとは「個々の奏者が優れた演奏技術と合奏能力を持ち、十分なアナリーゼ(楽曲分析)に基づいた自分の表現を、楽器を通してお互い自由に発言し合うこと」であり、良いアンサンブル演奏とは「お互いを見合い、お互いが聴き合い、十分にリハーサルを積むことで生まれる」と述べています。

私は吹奏楽部顧問を30年近くやってきました。例年、夏のコンクールが終わると3年生は引退し、1・2年生で冬に開催されるアンサンブルコンテストに向けた練習に入ります。顧問によって異なるとは思いますが、私の場合は、各部員の力量を考えながらできるだけ適切な編成を組む作業と演奏曲を決めるところまでやっていました。そして、合わせ練習はほとんど生徒の自主性に任せ、ある程度仕上がったところでレッスンを行うというかたちを取っていました。私の指導力不足もあり、佐藤氏が語る「良いアンサンブル」あるいは「良いアンサンブル演奏」とはほど遠いものでしたが、自分たちで良いアンサンブルをしようと努力してくれた部員たちの姿を、今懐かしく思い出します。

アンサンブル練習で大切にすべきことは何点かあります。例えば、一人一人が自分の譜面に責任を持って演奏すること。自分の譜面だけでなく他の奏者の譜面を把握しておくこと。他の人の音を聴くこと。音の出だし・かたち・処理を合わせること。音程を合わせること。フレーズ感を合わせること。ハーモニーを大切にすること。バランスを大切にすることなど。気を付けるべきことはたくさんありますが、教育活動におけるアンサンブルで最も大切にしたいことは、仲間同士のコミュニケーションだと私は思っています。

次号では、アンサンブルにおいて「合わせる」ということ、特に人間関係の大切さについて考えてみたいと思います。

第9号 「プロとの共演」

私はピアノを専攻していましたので、1人（ソロ）で演奏することが多かったですが、ピアノ連弾（1台のピアノを2人で弾く）や楽器・歌唱のピアノ伴奏など、他の演奏者と合わせる（アンサンブル）機会を与えていただいたことも多々ありました。特に20歳代から30歳代までは、プロの演奏家と共演させていただく機会にも恵まれ、大変貴重な経験をさせていただきました。

独奏・独唱の伴奏をする場合、まずは楽譜の研究と個人練習から始まり、次に合わせ練習を数多く重ね、本番を迎えます。合わせ練習では、音楽表現だけではなく会話によるコミュニケーションも大切にしながら、お互いの考え方や個性を理解し合い一つの音楽を作り上げていきます。合わせるということは、共に音楽を作り上げていく過程において大変重要なことなのです。

しかし、プロの演奏家と共演させていただく場合は、事前にじっくりと合わせる時間を取ることが不可能なこともありました。時には、本番前日に合わせ練習をし、当日のリハーサルを行い、即本番というパターンも経験しました。音楽的にはるかに優れているプロの演奏家の伴奏で、しかもコミュニケーションが十分に取れていない状態での本番となります。正直言って、逃げ出したいほどの恐怖があります。それでも私は、少ない合わせ練習を効果的なものとするため、様々な演奏パターン（相手の表現方法を何パターンも考え、それに対応すること）を考えながら個人練習を行いました。つまり、ソロに迷惑をかけずに対応できるよう、そして気持ちよく演奏していただけるよう、最大限の準備をして臨みました。おそらく私のレベルに合わせて妥協していただいたこと、さらには私の実力以上のものを引き出していただいたことも多々あったと感じています。演奏後は言葉で表現できないほどの達成感・満足感を味わうことができました。自己満足と言われるかもしれませんが、一人では味わえない音楽の喜びを感じた瞬間だったのです。

ところが、事前の練習とは全く違う演奏をされる方もいらっしゃいました。ホールの響き具合やその時の気分が関係してきたものだと思いますが、アマチュアの私にとっては対応が非常に困難となります。自分の力を本番中に試されていると感じました。でも逆に言うと、その時にしかできない演奏、その時にしか味わえない感覚を経験させていただくことができました。極度の緊張の中にも関わらず、不思議とその瞬間が楽しかったのを思い出します。

私のようなアマチュアピアニストを単なる伴奏者としてではなく、共演者として対等の立場で接していただいたプロの演奏家に、一つのことを追求してきた人の大きさや優しさ、そして厳しさを感じました。今、もう一度あの緊張感と感覚を味わいたいと思う自分と、練習をする時間と体力そして何といても気力がなくなってしまった自分をなげく私が存在しています。

第8号 「テンポとリズム」

今回は、テンポとリズムについての話です。

テンポとは、曲が演奏される速さを表します。つまり、1拍をどれくらいの速さで演奏するかということで、ゆっくり演奏すれば1拍の時間が長く、速く演奏すれば1拍の時間が短くなります。

リズムとは、音の長短や強弱が、あるまとまりをもって規則的に繰り返されることを表します。例えば、ワルツのリズムは「ブン・チャッ・チャッ」となります。

同じリズムでも、テンポを変えると全く違う感じになります。同じ曲のワルツのリズムを、すごく速いテンポで演奏すれば、とっても速いワルツ（身体がついていかないくらい速い踊り？）となり、すごく遅いテンポで演奏すれば、とっても遅いワルツ（太極拳の動きのような踊り？）となります。文章だと伝わりにくいのですが、イメージしていただけでしょうか。

さて、皆さんは人前で話をするときや会話をするときに、どのようなことに気を付けていますか？私は、次の4点を意識しながら話をしています。

1点目…「テンポを変えて話す」。例えば高齢者の方に話すときと若者に話すときでは、当然話すスピードを変えます。また、話す内容によっても、ゆっくりする部分や一気にたたみかけて話す部分があります。さらに、話す場所の響き具合によっても変えています。響きすぎる場所ではゆっくり話し、できるだけ言葉が聞き取りやすくなるよう注意しています。

2点目…「リズムを変えて話す」。前号で書かせていただいた「間」がポイントです。確かに、同じリズムで話すと心地よく聴くことができます。しかし、話のどこかに意図的に「間」を作ると、相手に考えてもらう時間を提供することができます。相手の反応を見ながら話すことが大切です。

3点目…「抑揚をつけて話す」。声の高低や強弱を変えることで、わかりやすい話になります。どの部分を重視しているかを相手に伝えるためにも、大切なポイントだと思います。

4点目…「表情豊かに話す」。お互いが分かり合えている場合、表情だけでも伝わることは結構ありますよね。言葉を交わさなくても意思疎通がはかれるようなときに使われる「阿吽（あうん）の呼吸」という言葉があります。「ツーカーの仲」ともよく言いますよね。でも、知らない人と話すということは大変緊張するものです。それでも、こわばった顔で話すより表情豊かに話したほうが感情は伝わりやすく、お互いのコミュニケーションも図りやすくなります。

以上、会話に関する4点のポイントを私なりに書かせてもらいましたが、実は音楽で自己表現するときにも重要な4点だと思います。音楽だろうと言葉だろうと、表現するという活動には共通するものがたくさんあるということ、改めて感じています。

第7号 「間」

今回は漢字の「間」についてのお話をさせていただきます。

「間」という漢字の成り立ちは、門の向こうに月が見える様子、つまり門を閉じても月の明かりがもれる「すきま」を表しているそうです。本来は門構えに月で「間」と書きますが、現在は門構えに日で「間」という略字になったそうです。

「間」という字は、音読みで「カン」「ケン」、訓読みで「あいだ」「はざま」「ま」と読みますが、今回は「ま」と読む場合の話です。

日本人は「間（ま）」を大切にするとよく言われます。日本伝統のスポーツである相撲や武道では、立ち合いの間や間合いを重視します。また、落語においても、名人と呼ばれる落語家は「間」の取り方が絶妙だと言われています。

音楽の世界においても、同じことが言えるかもしれません。

学校の授業では、西洋音楽におけるメトロノーム的なリズムを中心に教育されてきました。しかし最近では、能・歌舞伎や雅楽などの伝統芸能・伝統音楽を学習するようになってきました。日本人として日本の文化を学ぶのは当然のことだと思いますが、音楽教員が日本音楽について理解できているかということ、私も含めほぼ素人です。ただ、日本独特の美意識である「間」について考えることはできると思うのです。1, 2, 3, 4〜とカウントしながら奏でる音楽だけではなく、実態をつかみにくい感覚的な意識と言ってよい「間」について学ぶ。楽譜から学ぶ音楽だけではなく、師匠から弟子へそして次の世代へ継承されてきた日本の伝統音楽から学ぶ。教えることのできるリズムを学ぶとともに、教えることのできない感覚的な「間」を学ぶ。この意義は非常に大きいと考えます。

実は、私たちが日常的に会話をするときも「間」を意識しているはずです。「間」のない人の話って、内容は良くても聞くだけで疲れてしまい、その話し方だけが印象に残ってしまうことってよくありますよね。「間が悪い」「間延びする」「間がもたない」「間の抜けた」とかいう表現にも、そのことは表れているのではないのでしょうか。

校長は話をさせていただく機会が大変多い役職です。私は、自分の思いを伝えるためにも、「間」を大切にしていきたいと思います。

第6号 「フェルマータ」

今回は、音楽用語の「フェルマータ」について書かせていただきます。

「フェルマータ」は、この記号を付した部分の「音符」あるいは「休符」を伸ばすことを意味します。音楽の授業では、「程よく伸ばす」などと習います。

では「程よく伸ばす」とはどの程度伸ばせばよいのでしょうか。授業では2～3倍伸ばすと教えますが、実は伸ばし方に決まりはなく、演奏者の判断に任せられています。つまり、この伸ばし方に演奏者の考えや個性が表れるのです。

前号で紹介した「運命」の冒頭、「(ウ) ジャジャジャジャー」 「(ウ) ジャジャジャジャー」。この2回の「ジャー」に「フェルマータ」記号が付されています。短めに伸ばす指揮者もいれば、長めに伸ばす指揮者もいます。もちろん、2回の長さを変える指揮者もいます。同じ指揮者でも、演奏するオーケストラや演奏会場あるいはその時の気分で、長さが変わってくることもあります。様々な演奏を聴いてみて比較するのも、音楽の楽しみ方の一つだと思います。機会があれば皆さんも試してみてください。

さて、この「フェルマータ」は、前号で述べた「休符」の考え方に似ているものがあるかもしれません。「休符」は無音状態、「フェルマータ」は停止状態となります。この停止状態の時、ただ何となく伸ばすだけでなく、何を思いながら伸ばすのかが重要となります。それまでの振り返りのための停止なのか、次の展開へ進むための停止なのか、一人一人の考え方で「フェルマータ」の持つ意味が異なってくるのかもしれません。

このことは、人生においても同じことが言えるのではないかと考えます。

それまで突っ走ってきた人生において、それを振り返る時間は重要です。次へのステップを踏み出そうとするとき、しっかりと考え見極める時間が必要になります。

突然ですが、1979年から放送された「3年B組金八先生」というドラマを覚えていらっしゃいますか。武田鉄矢扮する坂本金八先生が、学級担任をしている3年B組に起こる問題を体当たりで解決し、教え子のために奔走するドラマでした。金八先生は様々な名言を残しています。その中に、「正しいという字は、一つ・止まると書きます。どうか一つ止まって判断できる人になって下さい。」という言葉があります。また、「歩くという字は、少し・止まると書く。急がなくていい、一步一步しっかり進んで下さい。」という言葉もあります。

時には、「フェルマータ」として「程よくとどまる時間」を人生に設けたいものですね。

第5号 「休符」

心身をリラックスさせボーっと過ごすことが、本来の「休む」という意味では一番なのかもしれません。でも、なかなかそういきません。ボーっとしているようでも頭の中では様々なことを考えてしまう。身体は休めたとしても心は休まらなかったということも多々あります。逆に身体を動かすことが心のリフレッシュにつながる人がいるかもしれません。人によって効果的な休みの取り方はそれぞれだと思いますが、人生において「休む」ということは非常に大切なことですよね。休むべきところで休む。私も気を付けます。

では、音楽の話をしていきます。ご存知のように、楽譜には「音符」と「休符」があります。演奏する者にとっても演奏を聴く者にとっても、休符のない音楽って疲れてしまいます。一般的に「休符」は「休む」という意味に捉えられがちですが、実は「休符」があるからこそ音楽に緊張感や躍動感が生まれる、とっても大切なものなのです。作曲家が使う「休符」には必ず意味があります。場面が変わる、緊張感を醸し出す、ほっと安心する、驚きを演出する、エネルギーをためる等々。何拍休まなければいけないという物理的なものではなく、一つの休符にも意味があり、それをどう表現できるか。演奏者にとって非常に重要なポイントとなります。音のない「休符」に隠された作曲家の思いをどう表現するか、「休符」の演奏にこそ演奏者の真の実力が問われるのかもしれません。

例えば、皆さんはベートーヴェン作曲の交響曲第5番をご存知でしょうか。日本では一般的に「運命」と呼ばれています。日本人にとって最も有名なクラシック曲の一つだと思います。ベートーヴェンが「このようにして運命は扉を開くのだ」と言った（真偽は定かでない）ため、「運命」と呼ばれるようになったと言われています。曲の冒頭は「ジャジャジャジャー」です。聴くだけではわかりませんが、楽譜には最初に8分休符が入っていて、「(ウ)ジャジャジャジャー」が本当です。ベートーヴェンはなぜ最初に8分休符を入れたのでしょうか。この休符にどのような意味を持たせているのでしょうか。現在でも様々な解釈が存在していて、指揮者によっても演奏は様々です。答えは？・・・私にはわかりません。しかし、休符があることによって何とも言えぬ緊張感が生まれていることは確かだと思います。

モーツァルトは、「音楽の最高の効果は、流れる音の間に現れる無音の状態にある。」と言ったそうです。

第4号 「演奏家」

前号までは私の体験に基づいた話を書かせていただきましたが、今回は演奏家についてのお話をさせていただきます。

作曲家は、楽曲を創作します。

演奏家は、演奏を通じて音楽表現を行います。

このことは今では当たり前のこととなっていますが、実は18世紀までは、作曲家と演奏家は同一人物でした。今でいうシンガーソングライターのようなものです。

19世紀に入り、市民文化の成立に伴って、様々な階層の人々が音楽を楽しむようになりました。そして、楽曲も複雑になっていき、高い演奏技術を持った職業演奏家が生まれました。作曲家が楽譜として残した曲を聴衆に伝えるという役割を、演奏家が果たすことになったのです。楽譜には、音高・テンポ・強弱などが示されていますが、その指示を忠実に守りながら、楽譜には記されていない作曲家の思いを、演奏家自身の解釈と個性によって音楽表現するようになったのです。

作曲家の作ったルール（楽譜）をもとにして、その作品の持つ芸術性を正當に再現しながら、演奏家が自分の思いを加え、新たな芸術として聴衆に伝える。聴衆は、作品の持つ芸術性と演奏家独自の音楽表現に共感したとき、感動を覚えるのです。

学校にも社会にもルールがあります。集団に属するということは、そのルールを守る義務が生じます。その義務を果たす中で、いかに自分らしさを出すか、自分の個性を発揮するか、自己表現できるかによって、その人の役割や価値が決まるのかもしれませんが。

私は作曲家にはなりませんでしたが、学生時代に自ら演奏する演奏家としての勉強をしてきました。そして教員となり、生徒たちの演奏をまとめる指揮者としての活動もしてきました。指揮者も、作曲家の思いを汲み取りながら音楽で表現する演奏家の一人と捉えることができます。つまりこれまでの私は、一定のルールの中で、自分をいかに表現するかという立場で頑張ってきたわけです。

校長となって私は考えました。校長とは作曲家なのか、演奏家なのか、聴衆なのか。おそらく、すべての立場になれないといけないのでしょうね。立場になるというより、その場にに応じて自然にできないとダメなのでしょうね。

人生、常に勉強です。お互いに頑張りましょう！

第3号 「受験失敗」

前号で、私は一年目の大学受験で失敗したと書きました。今回は、その失敗した受験の話です。

当時の東京G大のピアノ科入試は、確か3次試験までであったと思います。実力のなかった私は、1次試験さえ通過することができませんでした。

1次試験の課題曲は、ショパンのエチュード1曲とプレリュード3曲の計4曲。技術不足であった私にとって、最後に演奏するプレリュードの3曲目の演奏が最大の山場でした。受験する前から、この曲をどう攻略するか、どう乗り越えるか、そればかりを考えていました。

18年の人生で味わったことのない最大の緊張感の中、演奏を始めました。1曲目のエチュード。我ながらうまく弾けました。これはいけると思った私は、2曲目と3曲目のプレリュードも無難に弾きこなしました。いよいよ最後の曲。ここから私は、自分の演奏をほとんど覚えていません。「難しい曲だ、頑張らなくては。」という意識からか、途中で頭が真っ白になってしまったのです。1カ所だけ指がひっかかってしまったことは記憶にあります。でも、すぐに弾きなおしたと思っていました。

受験後、審査員でもあった私の師匠に電話し、「どうでしたでしょうか？」とおそるおそる尋ねました。そこで師匠から一言、「3曲目までは良かったのに、最後の曲でなぜ演奏を中断してしまったのか？」と、強い口調でお叱りを受けました。「指がひっかかってしまいました。申し訳ありませんでした。」と答えるのがやっとでした。後日、私はすぐに弾きなおしたつもりだったのに、実は10秒弱の間があったと聞きました。ショックでした。

私にとって、この出来事は人生最大の失敗であり挫折を感じたことです。でも、この失敗から学んだこともあります。

「緊張は誰でもする。緊張して迎えた本番が、本当の実力である。緊張したからうまくいかなかったという言い訳は、絶対にしてはならない。」

「実力がないからこそ、不安を残したまま本番を迎えてはだめである。それまでの計画・準備がすべてである。」

どれだけ頑張ったとしても報われないことは確かにあります。でも、それは誰のせいでもなく、自分の責任なのです。

定年まで残り数年となった今、大学に入ってから現在までもっともっと頑張っておけばと良かったと思うこともありますが、高校での3年間、私はガムシャラに頑張ってきたという事実は残っており、人生を左右する大切な3年間であったことは間違いありません。逆に言うと、この3年間の頑張りのみで、私はこれまで生きてこられたのかもしれない。だからこそ、「今しかないこの時を大切にしてほしい。」と、生徒に強く訴えたいのです。

第2号 「高校時代」

第1号で、私の専攻楽器はピアノだということを書きました。今回は主に、私の高校時代のピアノ練習についての話をさせていただきます。

私がピアノを本格的に習い始めたのは小学2年の時でした。当時、男子でピアノを習う者はほとんどいませんでしたが、好きなことをただやっているという意識からか、恥ずかしさを感じたことはありませんでした。

中学になると、島根大学の先生にレッスンを受けるようになり、吹奏楽部の練習も頑張りながら、毎週出雲から松江に通いました。これも不思議と苦に感じませんでした。

そして高校。島根大学の先生から東京G大学の先生を紹介され、2週間に1回、出雲から東京へレッスンに通いました。

当時、土曜日は半日授業で、土曜の夕方に出雲を出発する夜行列車出雲号（現在のサンライズ出雲）に乗り、日曜日の早朝に東京着。午前中にレッスンを受け、午後はブラブラ。その日の夕方に東京駅から出雲号に乗り、月曜日の朝に出雲着。その後学校へ行って授業を受ける。この繰り返しでした。でも、これも苦に感じたことはありませんでした。

レッスンの日以外は、ひたすらピアノの練習に明け暮れました。朝の6時に起きて、登校するまでに1時間練習。学校で真面目に授業を受ける。ピアノの練習時間確保のため部活動には入っていませんでしたので、夕方帰宅したらすぐに練習。勉強時間も数時間確保しながら、寝るまでに4時間練習。つまりピアノだけでも一日に5時間は練習する。こんな生活を毎日過ごしました。

3年生の1月中旬、共通一次試験（現在のセンター試験）が終了した後は、東京にアパートを借り、そこにグランドピアノを入れて毎日10時間弾きまくる。レッスンにも通う。それが当たり前だと思っていた三島少年は、なんの疑問も感じず、ひたすら頑張りました。

それだけ頑張ったのに、1年目の受験は失敗。その時点で自分の実力のなさを痛感し、2年目は地元の大学を受験し合格。そして現在に至っています。

今振り返ると、自分の高校時代ってすごいなと思ってしまいます。よく頑張ったと自分を褒めてやりたい。今同じことをやれと言われても、絶対無理です。ただ言えることは、高校時代にガムシャラに頑張ったことは、必ずや人生に生きてくる。その後の人生を変えるということ。その時には結果が出なかったかもしれませんが、一つのことに集中して頑張ったという事実は残ります。それが自分の自信につながり、自分の仕事や生活に活かされています。私が証人です。

高校時代は、人生のうちのたったの3年間ではありますが、人生に大きな影響を与える3年間です。時が経ち、自分の人生を振り返ったとき、高校時代に頑張ったことが今役立っていると思えるような充実した高校生活を生徒に送ってほしい。私は自分の体験があるからこそ、このことを強く思っています。

第1号 「ピアノ」

校長として皆さんに何か情報を発信したいと思い様々なことを考えましたが、自分らしさを出すためにも、音楽に関係することを書かせていただくこととしました。

私はこれまで音楽を学び、生徒たちに音楽の素晴らしさを伝え、音楽に助けられ、音楽を通じて知り合った仲間たちに支え続けられてきました。その感謝の気持ちと音楽の持つ力をお伝えできればと思っています。

では1回目として、私が専攻してきたピアノという楽器の歴史について書きます。

現在のピアノの原型を作ったのは、イタリアのクリストフォリという人です。それまで鍵盤楽器の主流であったチェンバロという楽器は、爪で弦をはじいて鳴らす方式で、強弱の変化がほとんどつかず、それを不満に感じていたクリストフォリが、ハンマー仕掛けで弦を打って鳴らすという、現在のピアノメカニズムを1709年に発明しました。彼はこのメカニズムを備えた楽器を『クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ』（弱い音も強い音も出せる鍵盤楽器）と名付けました。この名称がだんだん短縮され、『ピアノフォルテ』となり、現在では『ピアノ』と呼ばれるようになったのです。

ピアノが誕生して300年以上になりますが、技術の発展とともに改良を重ね、19世紀末には、ほぼ現在と同じ楽器が完成しました。20世紀になってからは、ほとんど変化が見られません。

ピアノ（p）は弱い音、フォルテ（f）は強い音という意味ですよね。現在呼んでいる『ピアノ』という言葉だけを聞くと、弱い音しか出ないのかと考えてしまいましたが、本当はとっても強い音、とっても弱い音、迫力のある音、繊細な音、いろいろな音が出せる楽器なのです。だから『ピアノ』という楽器は、正式には「p f」と表記し、「楽器の王様」と呼ばれているのです。

私もピアノと同じように、いろいろな音色を奏でることができるような人間になりたいと思っています。皆さんも、ピアノあるいは音楽に限らず、いろいろな方法で自己表現ができると良いなと思いませんか？そして、自己表現したことが相手に伝わり、共感してもらって、とっても素晴らしいことだと思いませんか？

文章表現が苦手な私ですが、今後も音楽を通して形成された私の人生観・価値観を中心に、自分の体験も交えながらご紹介できればと思います。不定期掲載となりますが、ご一読いただければ幸いに存じます。何卒よろしく申し上げます。